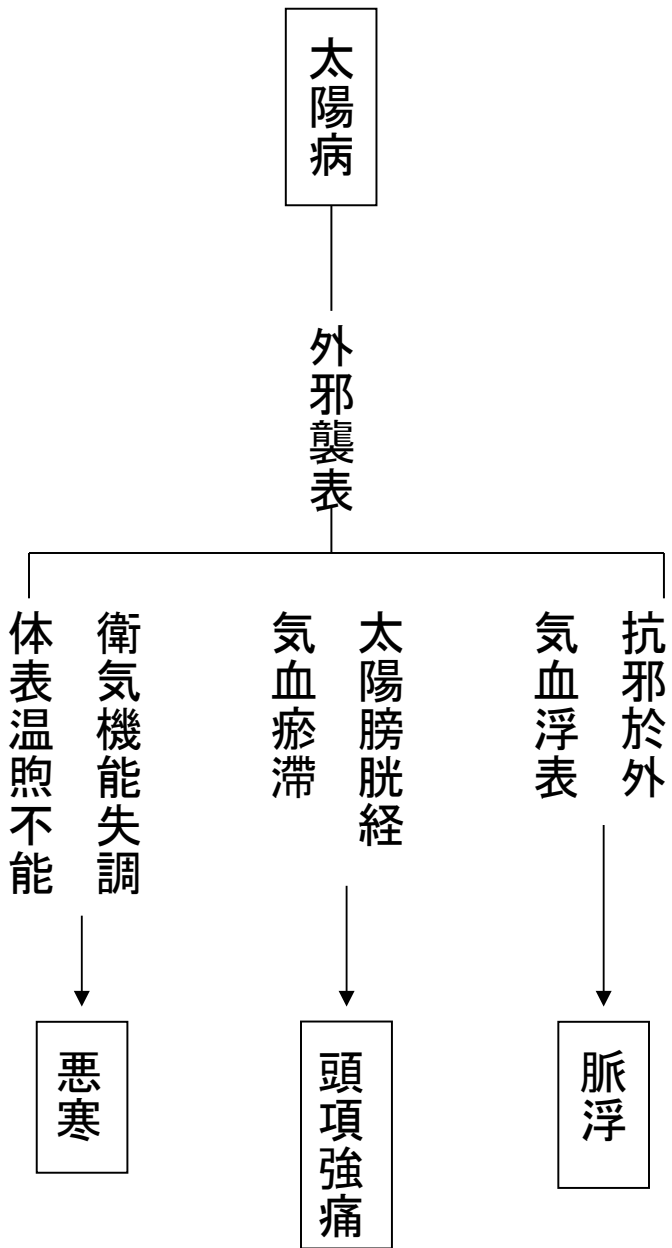


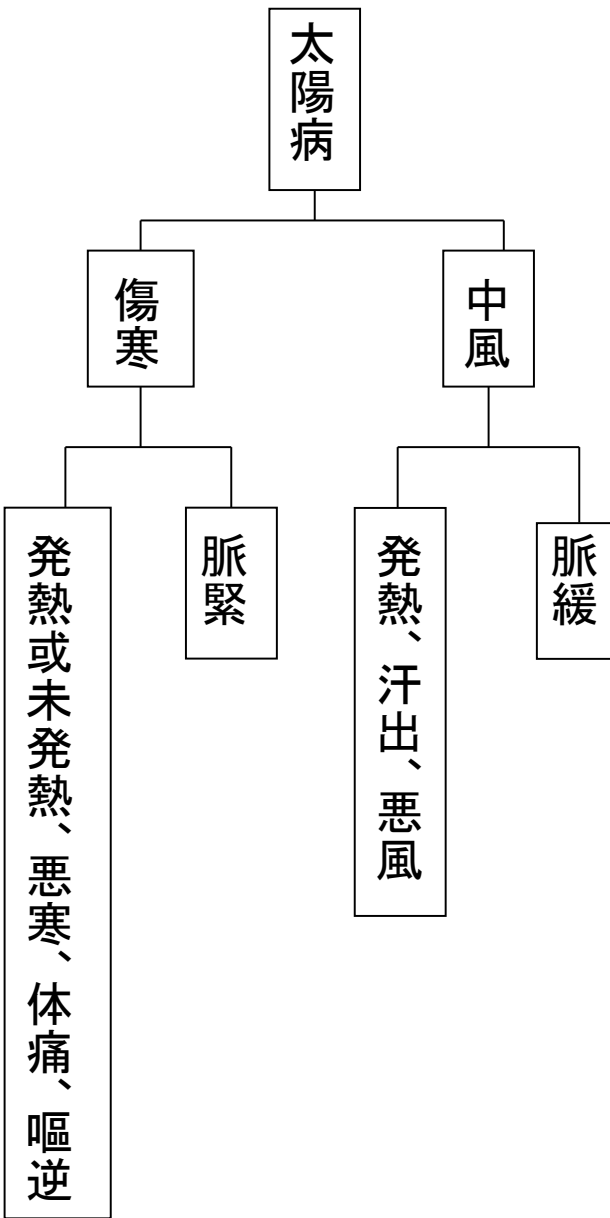
# 弁太陽病脈証并治上

第一条 太陽之病爲、脈浮、頭項強痛而惡寒。

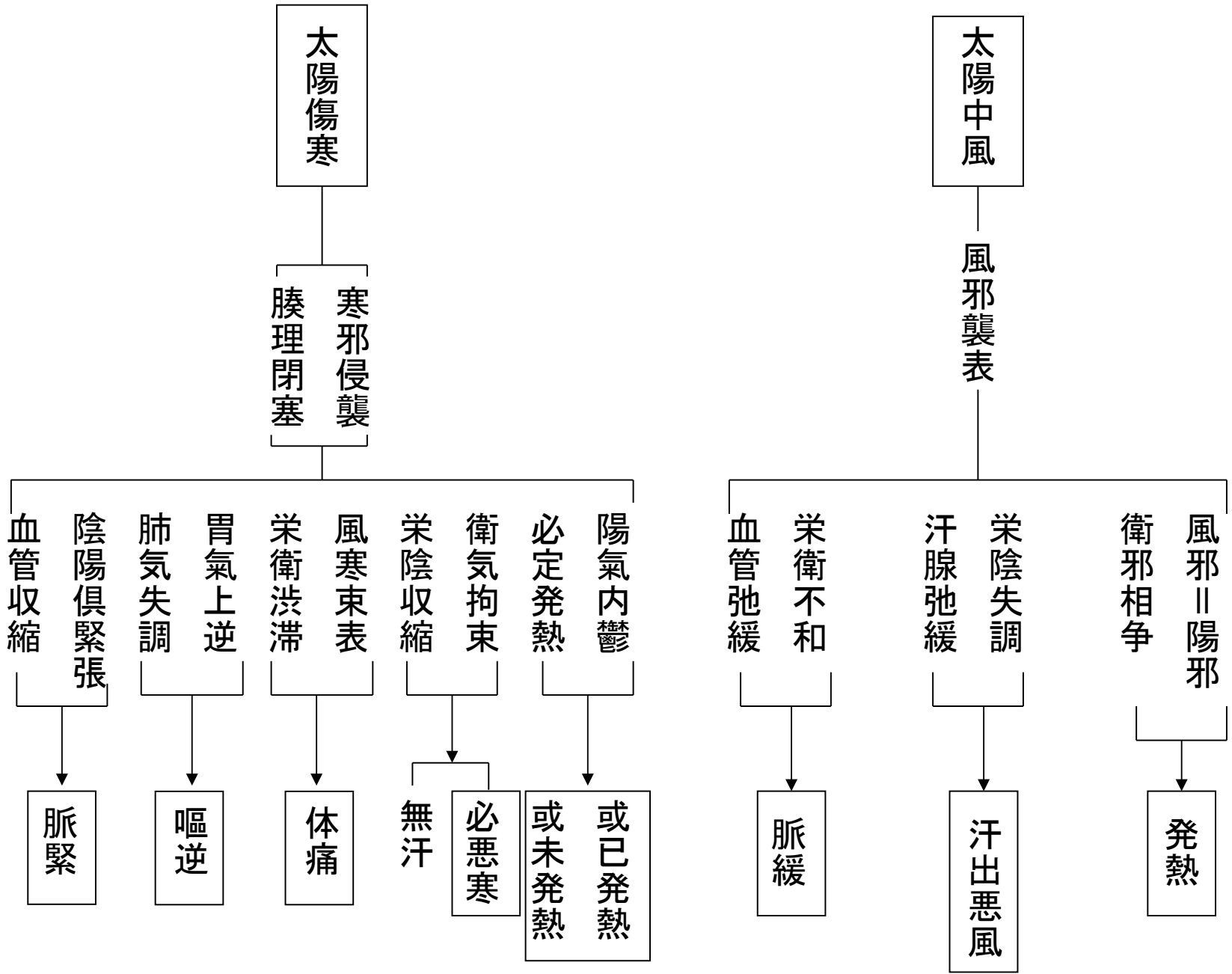


第二条 太陽病、發熱、汗出、惡風、脈緩者、名爲中風。

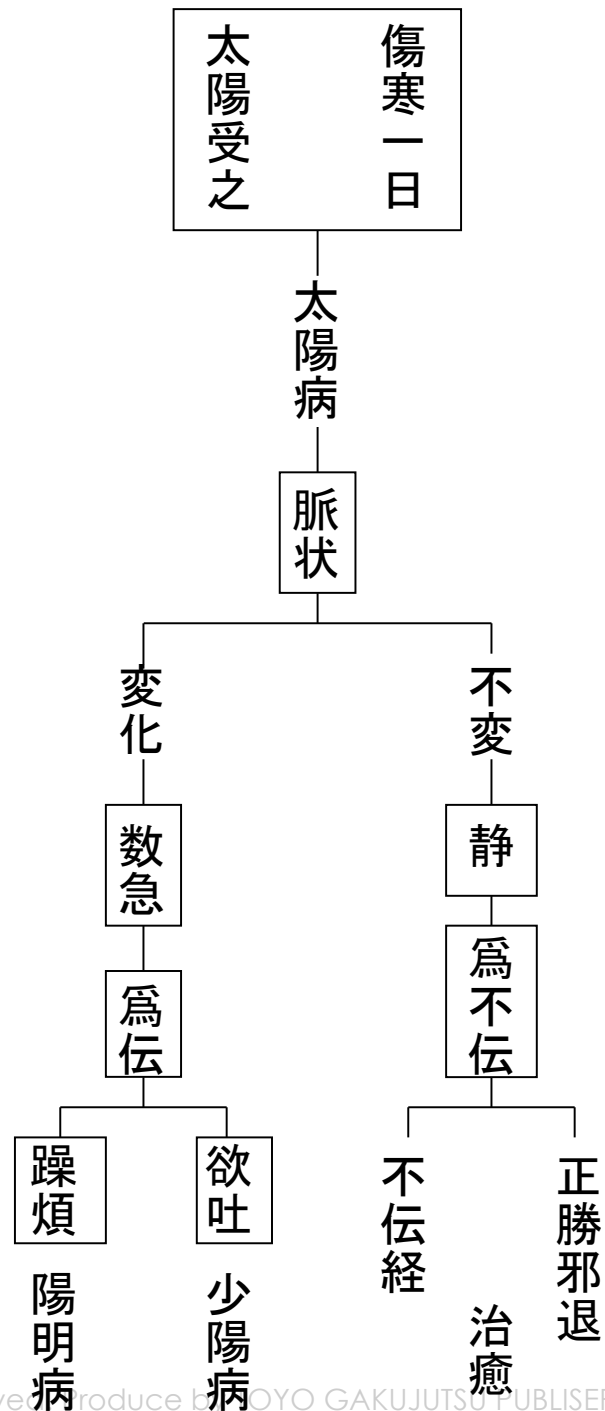
第三条 太陽病、或已發熱、或未發熱、必惡寒、体痛、嘔逆、脈陰陽俱緊者、名爲傷寒。



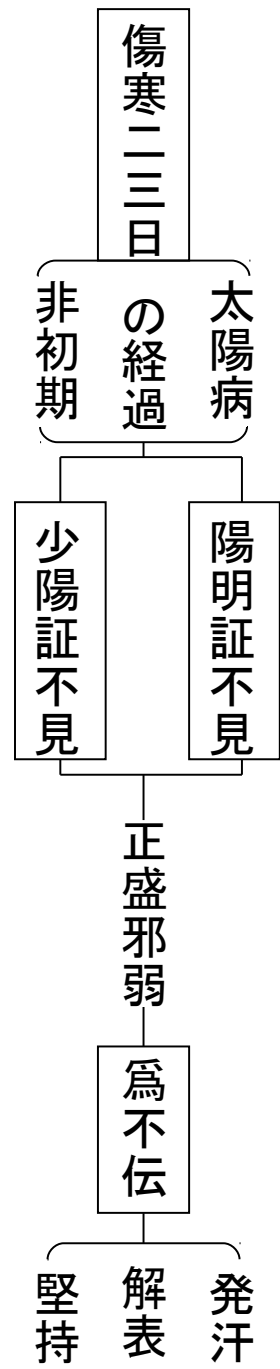
# 太陽中風と傷寒



第四条 傷寒一日、太陽受之。脈若靜者爲不伝。頗欲吐、若躁煩、脈數急者爲伝也。

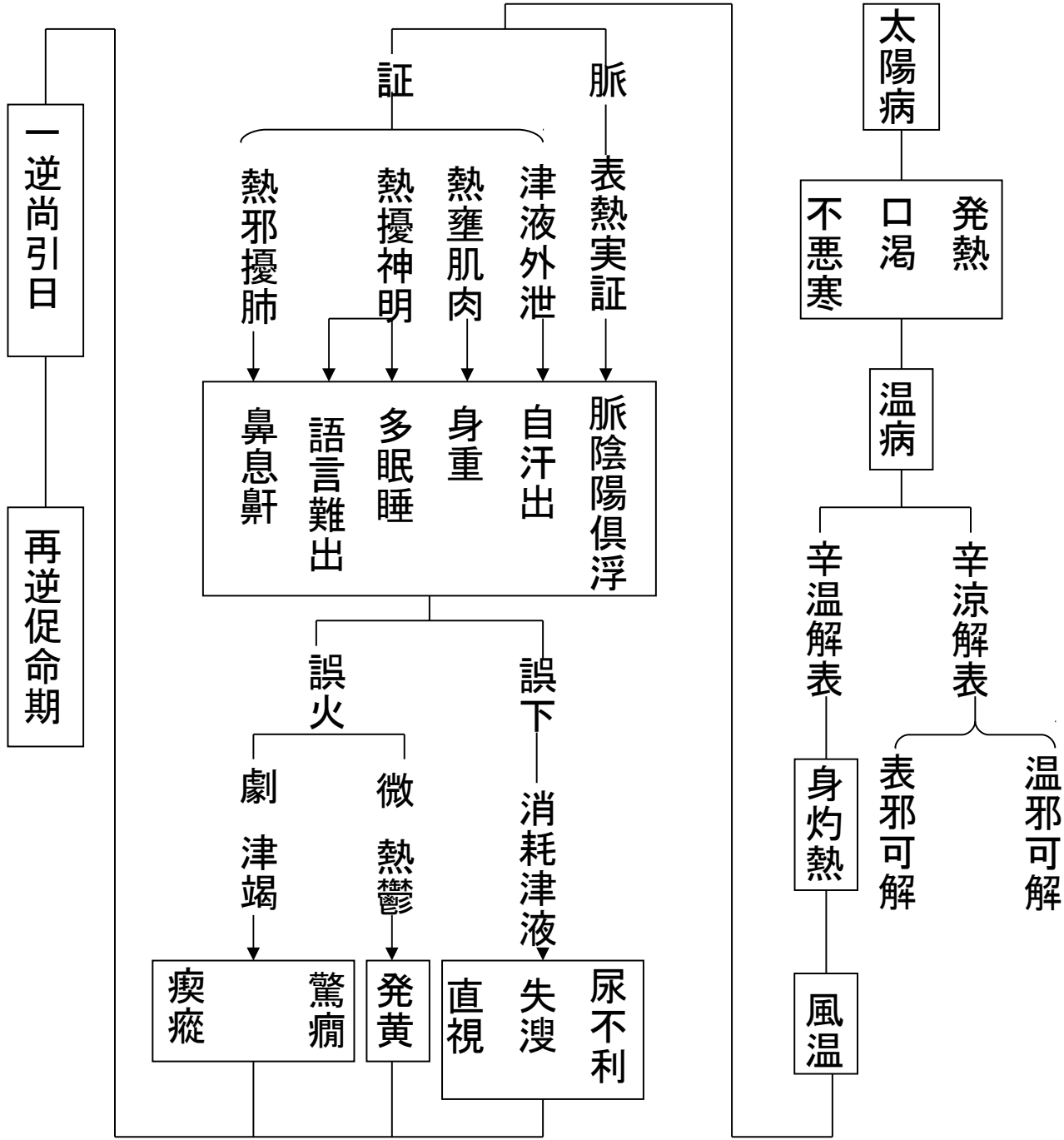


第五条 傷寒二三日、陽明、少陽証不見者、爲不伝也。



第六條 太陽病、發熱而渴、不惡寒者爲溫病。若發汗已、身灼熱者

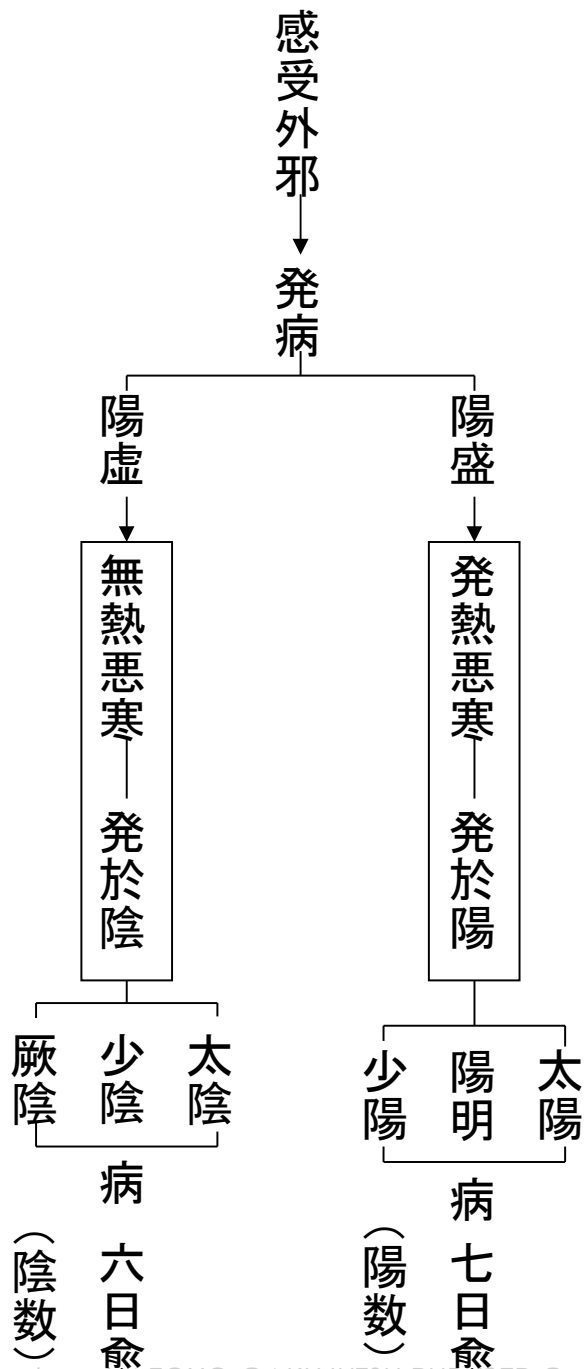
名風溫。風溫爲病、脈陰陽俱浮、自汗出、身重、多眠睡、鼻息必鼾、語言難出。若被下者、小便不利、直視、失溲。若被火者、微發黃色、劇則如驚癇、時瘈瘲。若火薰之、一逆尚引日、再逆促命期。



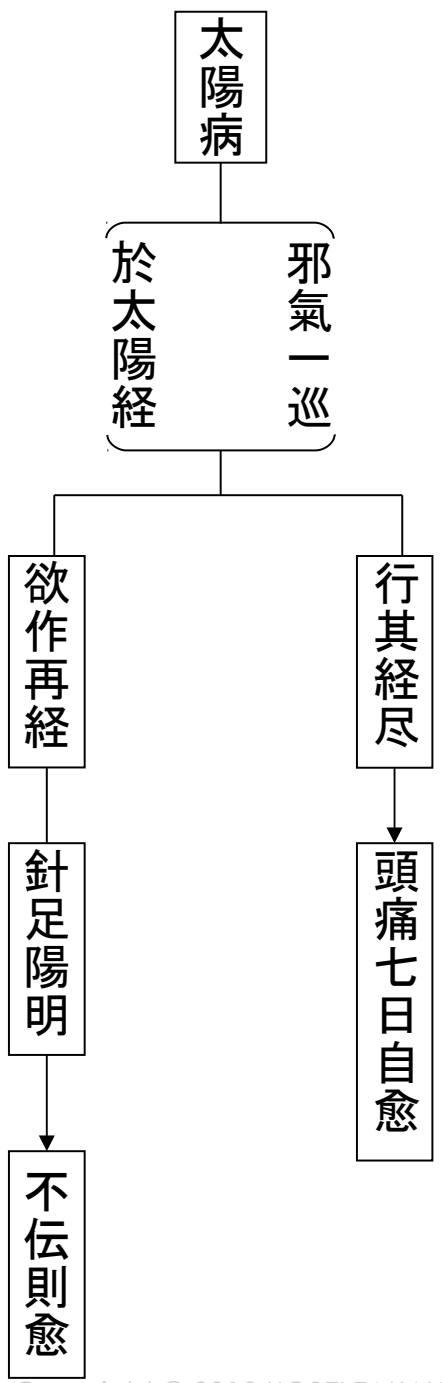
# 傷寒と温病の証治の比較

病 証		傷 寒	温 病
病 因		風寒の邪	風温の邪
証    候	熱感	比較的軽い	初期から顕著
	悪寒	重 い	あまり無い
	口渇	な い	有ることが多い
	頭痛	有ることが多い	あまり無い
	脈象	浮 緊	浮 数
治 則		辛温解表	辛涼解表
予 後		陽虚裏寒となり 衰弱しやすい	虚熱傷陰のため 消耗しやすい

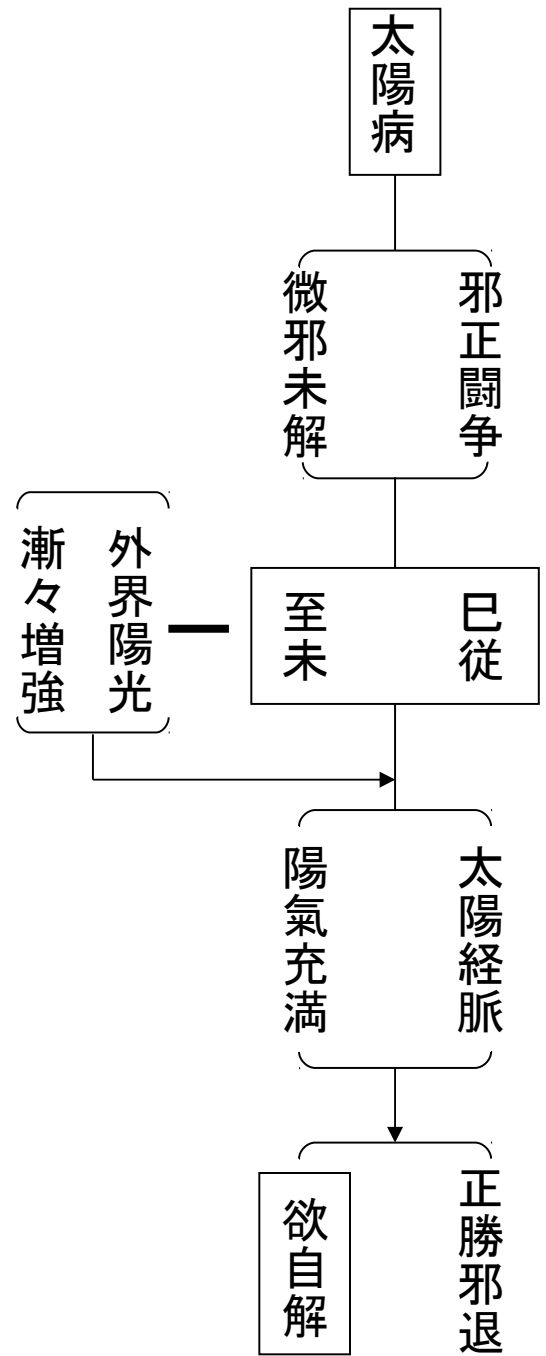
第七條 病有發熱惡寒者發於陽也。無熱惡寒者發於陰也。發於陽七日愈。發於陰六日愈。以陽數七、陰數六故也。



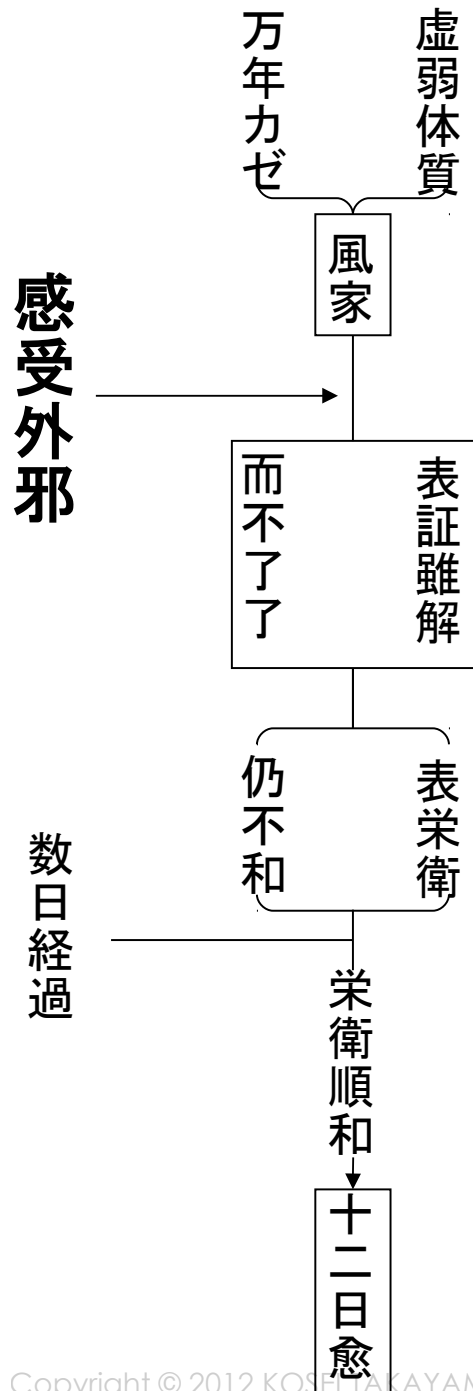
第八條 太陽病、頭痛至七日以上自愈者、以行其經尽故也。若欲作再經者、針足陽明、使經不伝則愈。



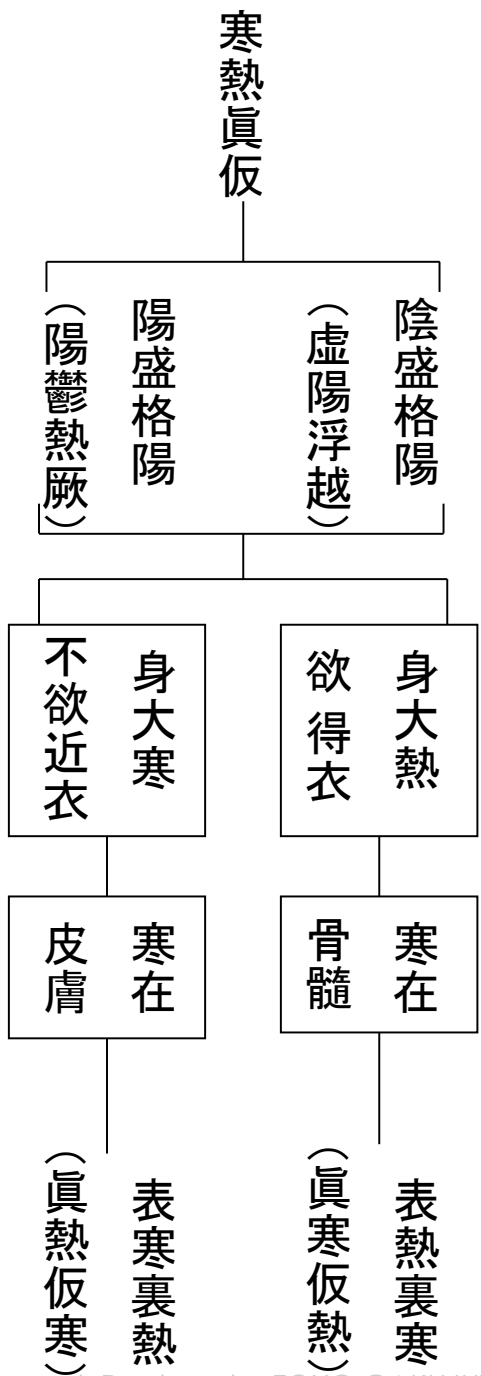
第九條 太陽病欲解時、從已至未上。



第十條 風家、表解而不了了者、十二日愈。



十一條 病人身大熱、反欲得衣者、熱在皮膚、寒在骨髓也。  
 身大寒、反不欲近衣者、寒在皮膚、熱在骨髓也。





第十二条 太陽中風、陽浮而陰弱、陽浮者熱自發。陰弱者汗自出。

濇濇惡寒、淅淅惡風、翕翕發熱、鼻鳴乾嘔者、桂枝湯主之。

太陽中風

証候

脈象

風寒外襲  
溫煦不能  
邪正鬪爭  
肺寒不宣  
胃寒氣逆

榮陰失常

衛陽阻害

陰弱

陽浮

榮陰不固  
津液外泄

陽氣趨表  
邪與相爭

乾嘔  
鼻鳴  
翕翕發熱  
淅淅惡風  
濇濇惡寒

汗自出

熱自發

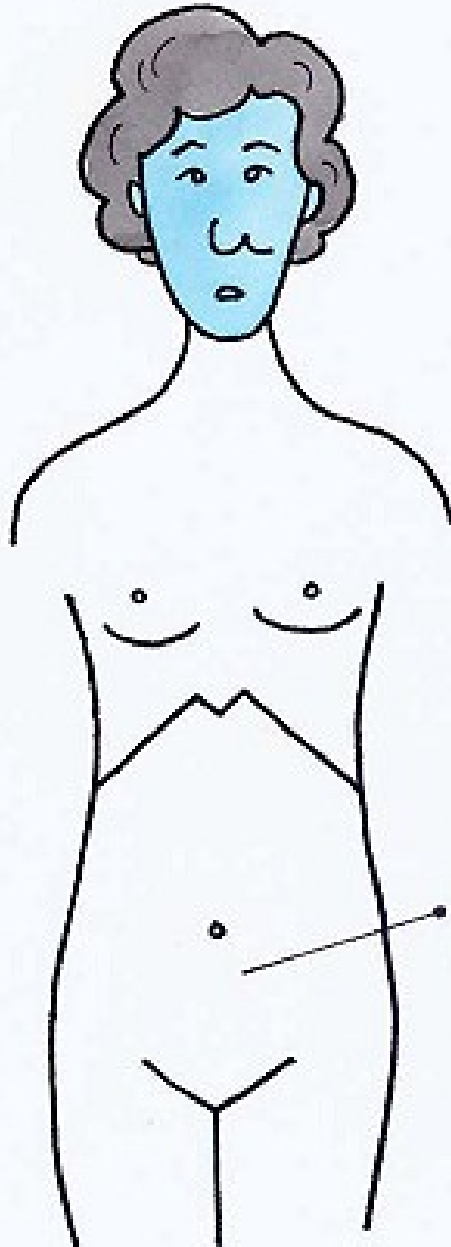
溫陽解肌

調和榮衛

桂枝湯主之

桂枝 發汗解肌  
芍藥 補陰收汗  
甘草 味甘主和  
生姜 辛溫主散  
大棗 味甘補中

# 桂枝湯の証 \*



腹部はやや軟  
特別な腹証を  
みとめないのが  
特徴

## 方意

主に太陽病に用いられるが漢方の最も基本的な薬方である。

表寒虚証用

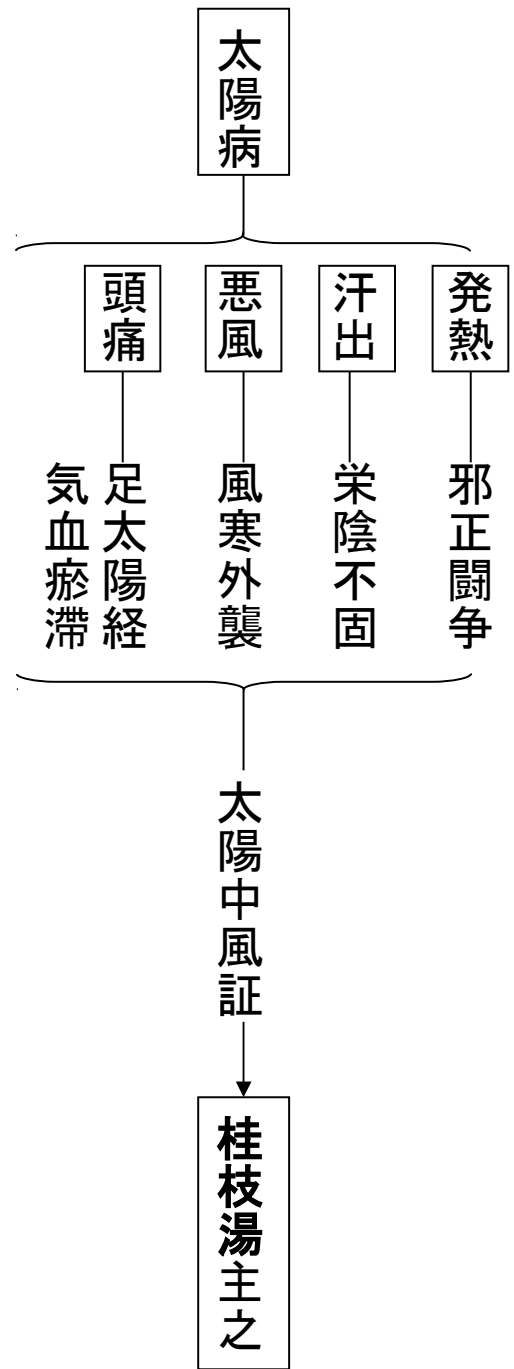
脈は浮緩

舌は淡紅 無苔か薄い白苔

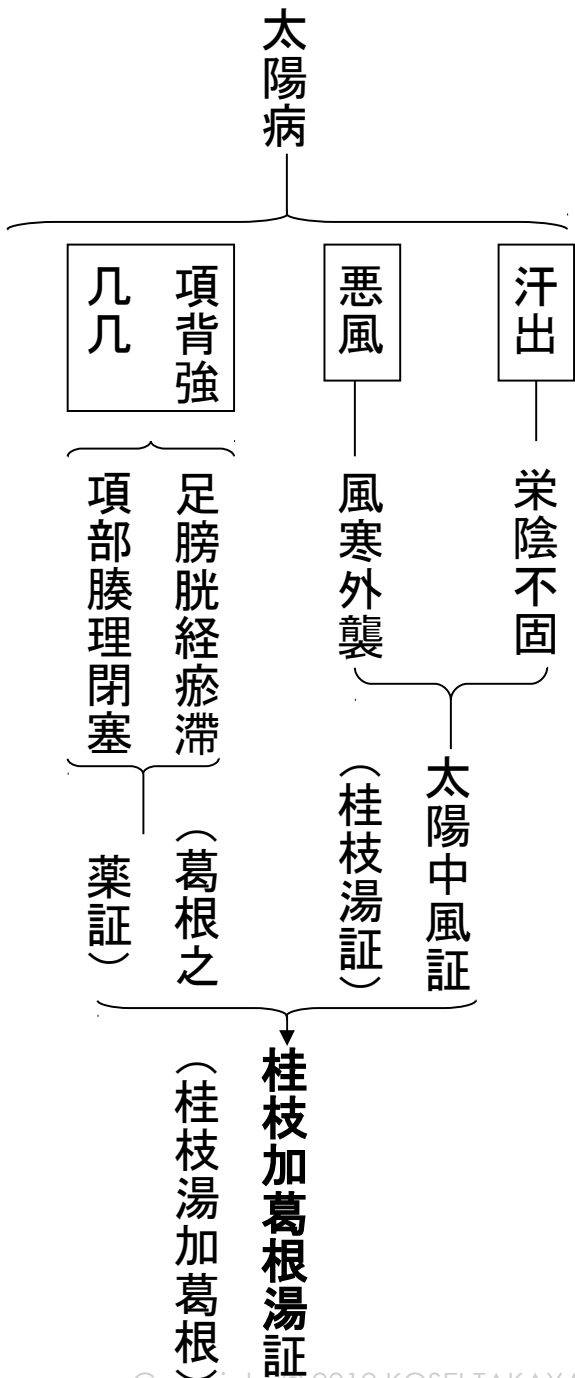
## 弁証のTrias

- 1) 軽い鼻カゼ症状
- 2) 発熱と悪風
- 3) 脈浮緩で自汗有り

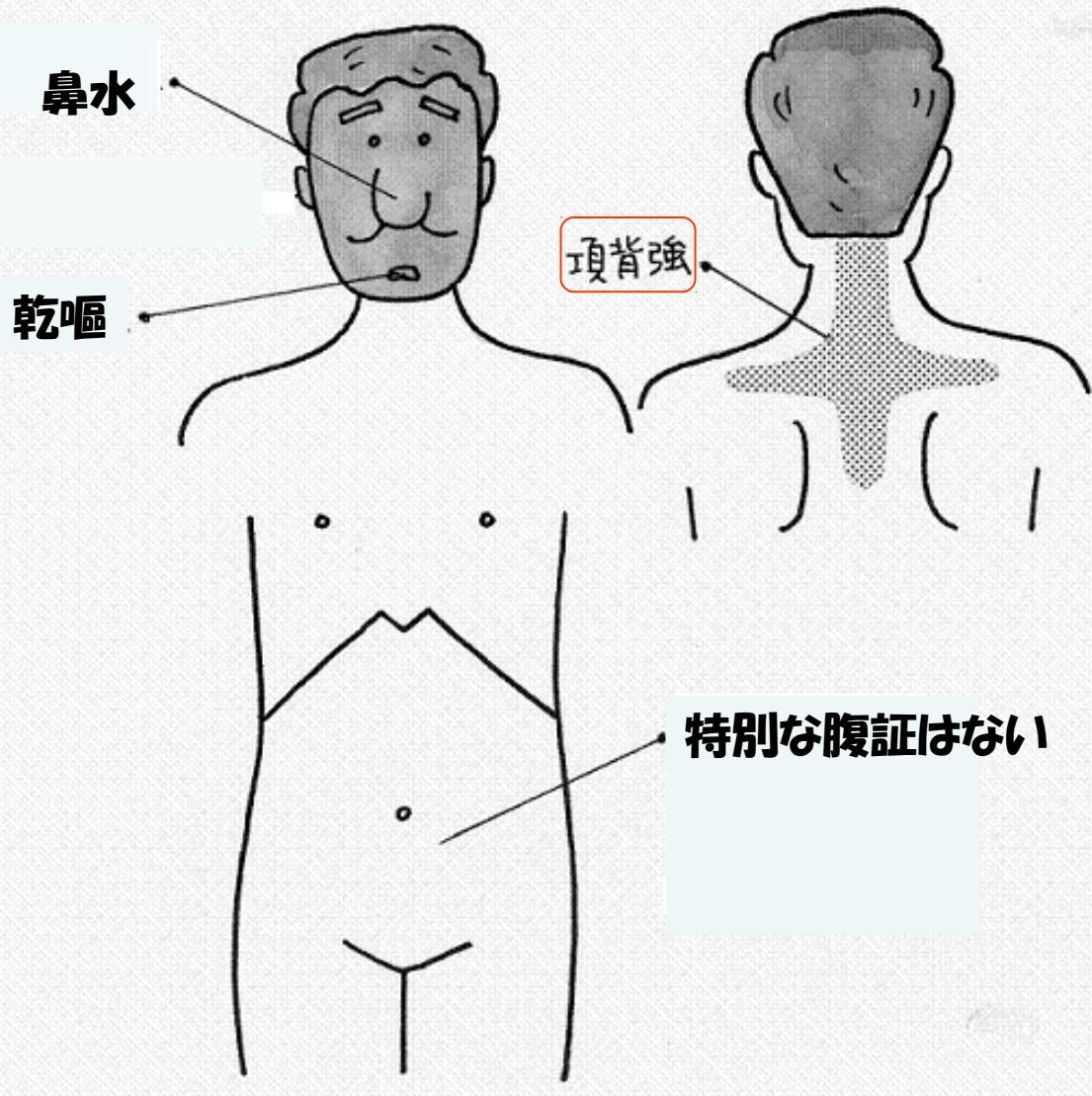
第十三条 太陽病、頭痛、發熱、汗出、惡風、桂枝湯主之。



第十四条 太陽病、項背強几几、反汗出惡風者、桂枝加葛根湯主之。



# 桂枝加葛根湯の証



方意

太陽中風の中で、足膀胱経の気血の阻滯が著明となり、項部の腠理の閉塞が生じ、太陽病中風証の証候に加えて項背部の凝りが強く現れた。

脈は太陽中風で浮緩。

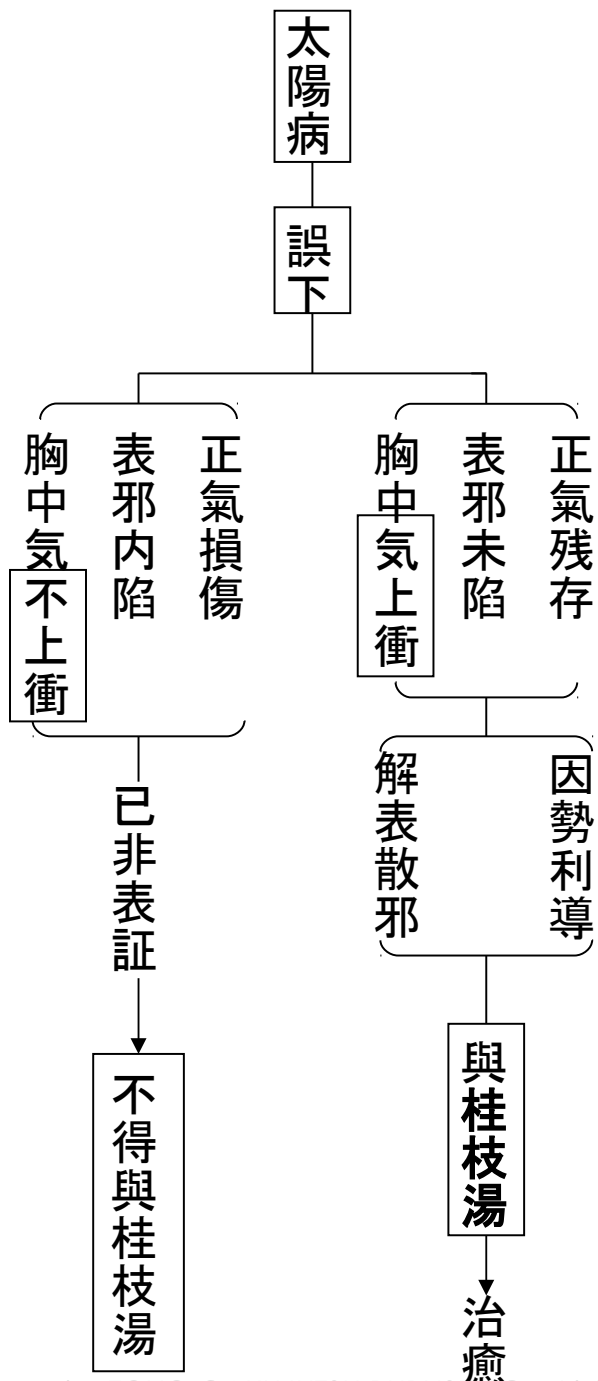
舌は正常所見、変化なし。

弁証のTrias

- 1) 項背強(背筋の凝り)
- 2) 自汗、悪風
- 3) 脈は浮緩(太陽病)

第十五条 太陽病、下之後、其氣上衝者、可與桂枝湯、方用前法。

若不上衝者、不得與之。

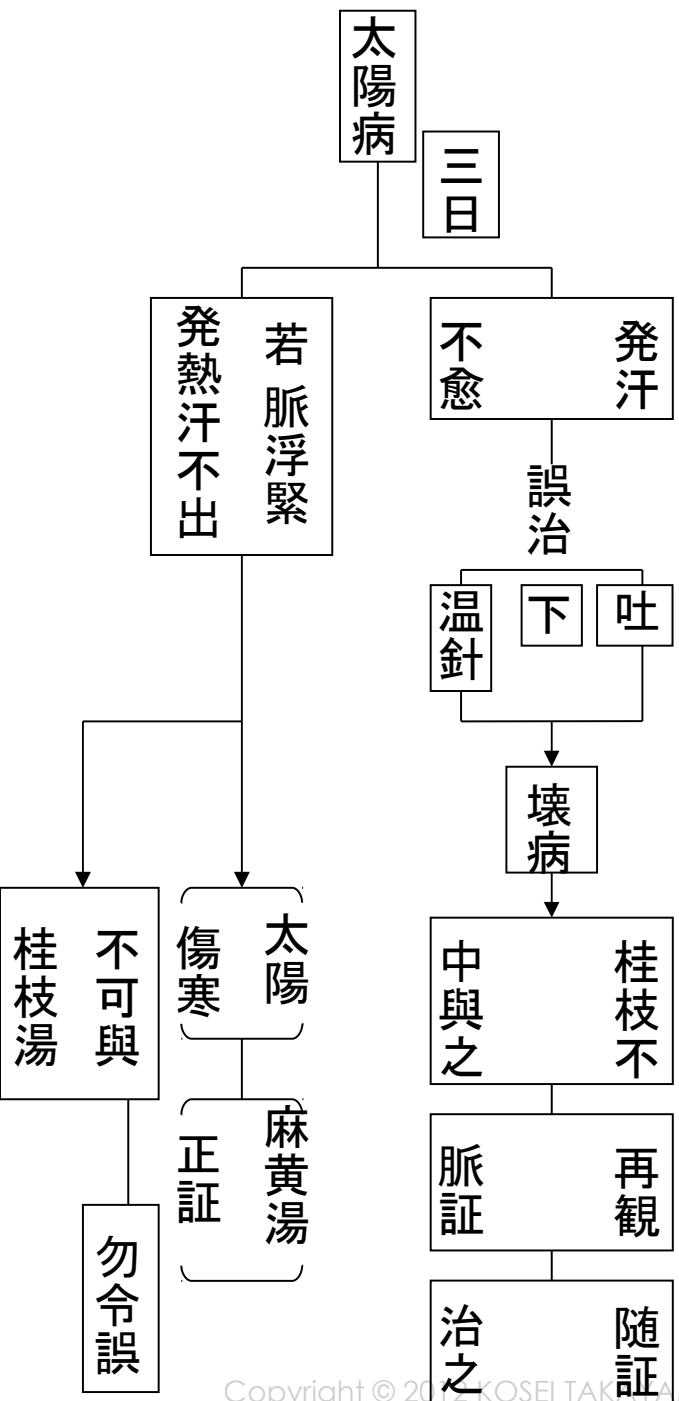


第十六条 太陽病三日、已發汗、若吐、若下、若溫針、仍不解者、

此為壞病、桂枝不中與之也。觀其脈証、知犯何逆、隨

証治之。桂枝本為解肌、若其人脈浮緊、發熱、汗不出

者、不可與之也。常須識此、勿令誤也。



第十七条 若酒客病、不可與桂枝湯、得之則嘔、以酒客不喜甘

故也。

酒客  
(アル中、或  
呑ん兵衛)

中焦湿熱

不可與  
桂枝湯

桂枝湯  
誤與

助長  
湿熱

得之  
則嘔

第十八条 喘家、作桂枝湯、加厚朴、杏子佳。

喘家  
(喘息持)

感受風邪  
表寒虛証

桂枝湯証  
+  
喘息誘発

解表第一  
平喘第二

桂枝湯  
加厚朴  
杏子(仁)

発汗解肌

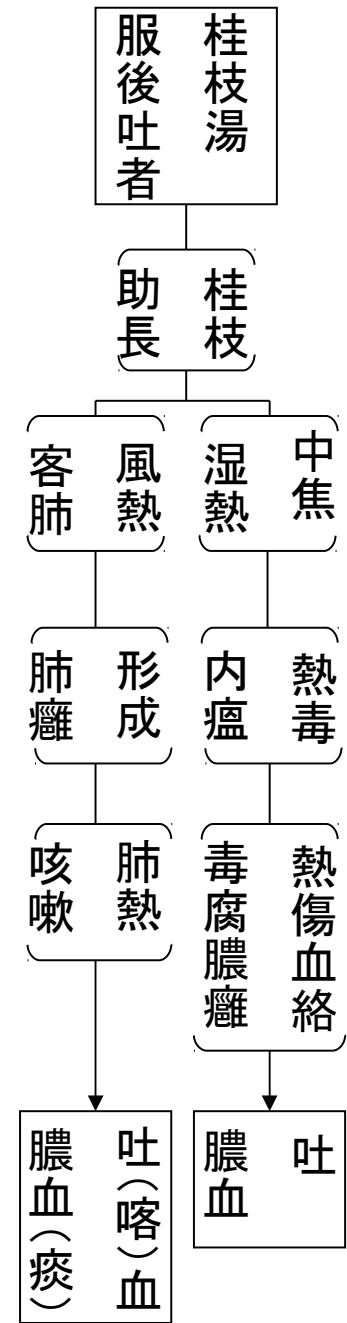
降気平喘

鎮咳祛痰

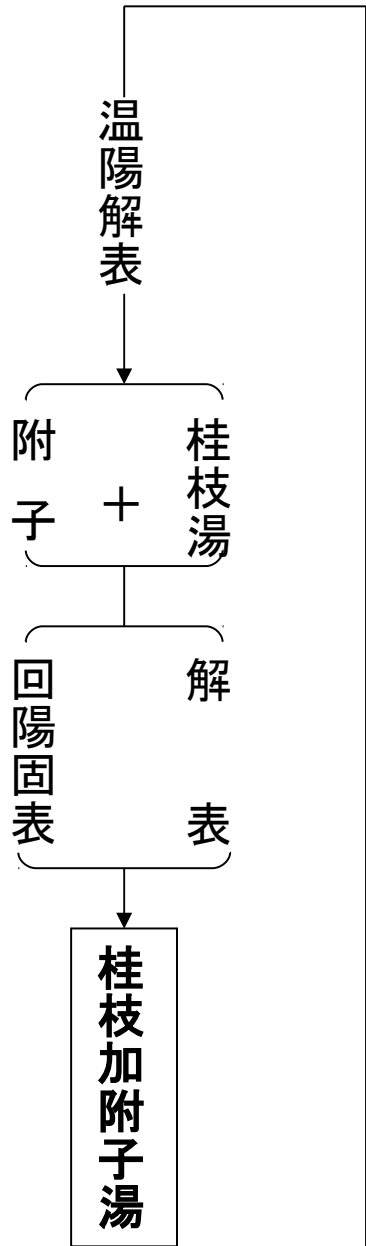
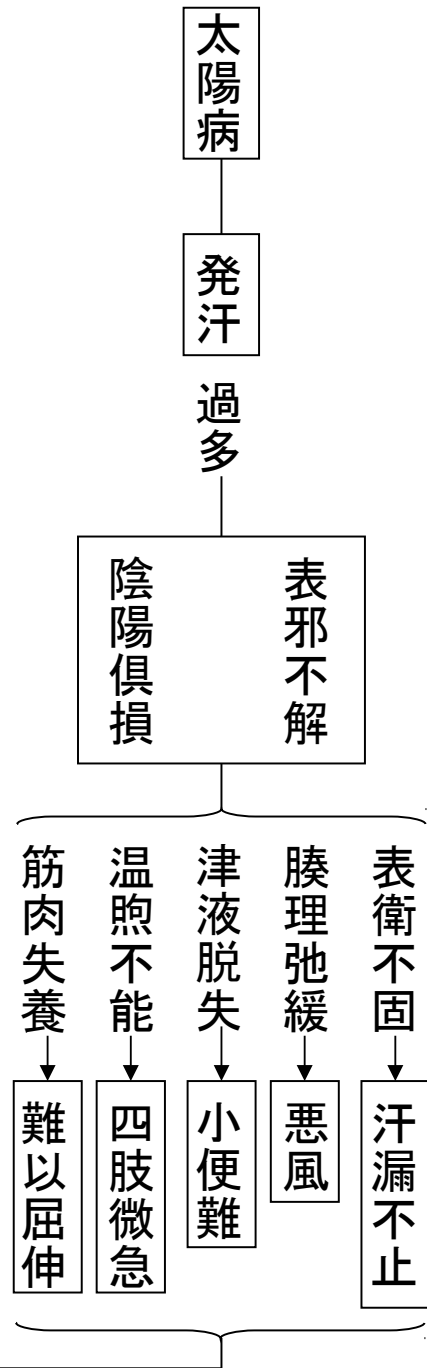
解表

平喘

第十九条 凡服桂枝湯吐者、其後必吐膿血也。



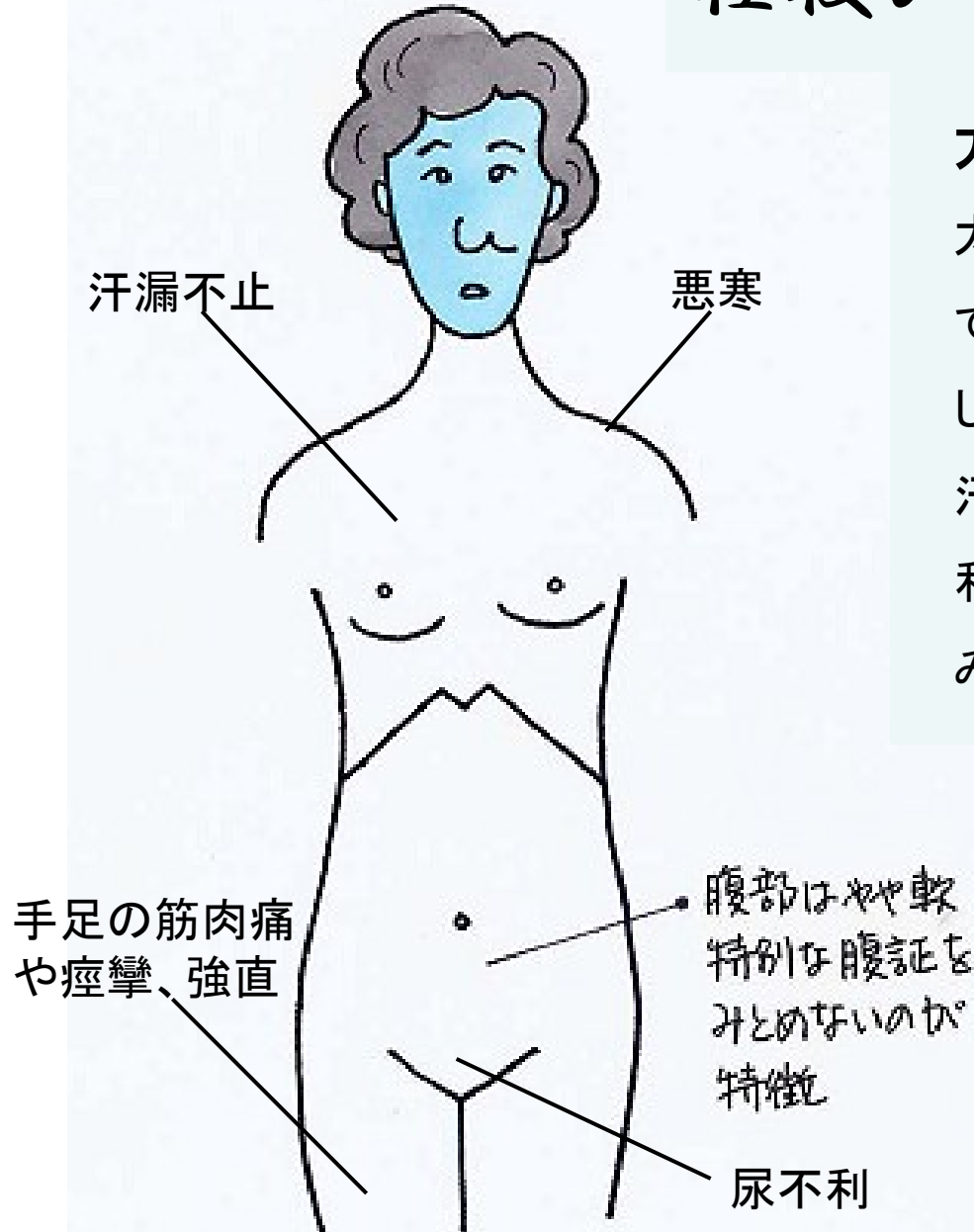
第二十条 太陽病、発汗、遂漏不止、其人惡風、小便難、四肢微急、難以屈伸者、桂枝加附子湯主之。



# 桂枝加附子湯の証

## 方意

太陽病の治療で発汗の仕方が不適切で発汗させ過ぎた結果、陰陽が俱に虚し、表邪は残存するが、表衛が虚して汗が止まらず津液は脱失して小便不利となる。陽氣不足で四肢が冷えて痛み、陰血不足で筋肉が拘攣する。

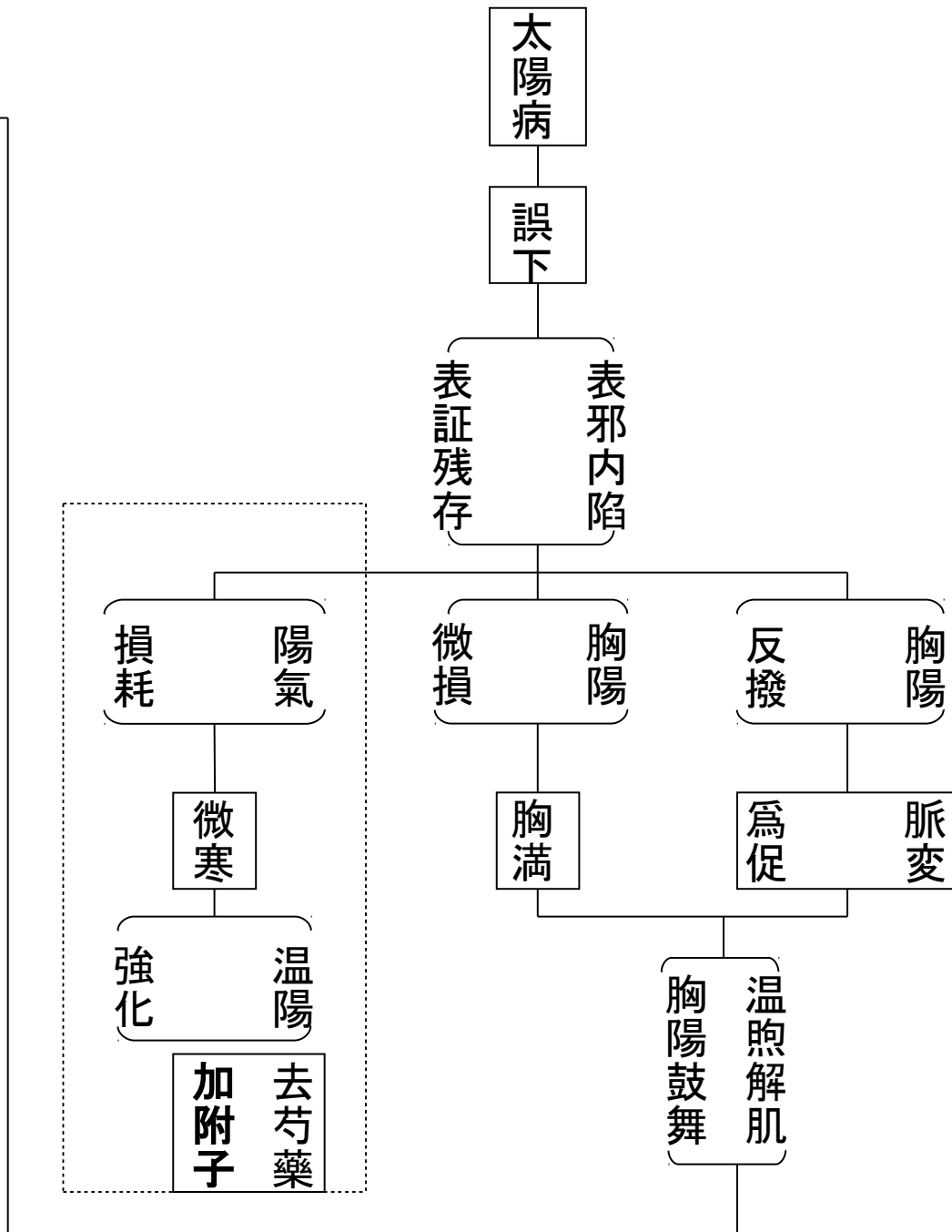


## 弁証のTrias

- 1) 冷汗が止まらない
- 2) 四肢筋痛、拘攣
- 3) 尿量減少

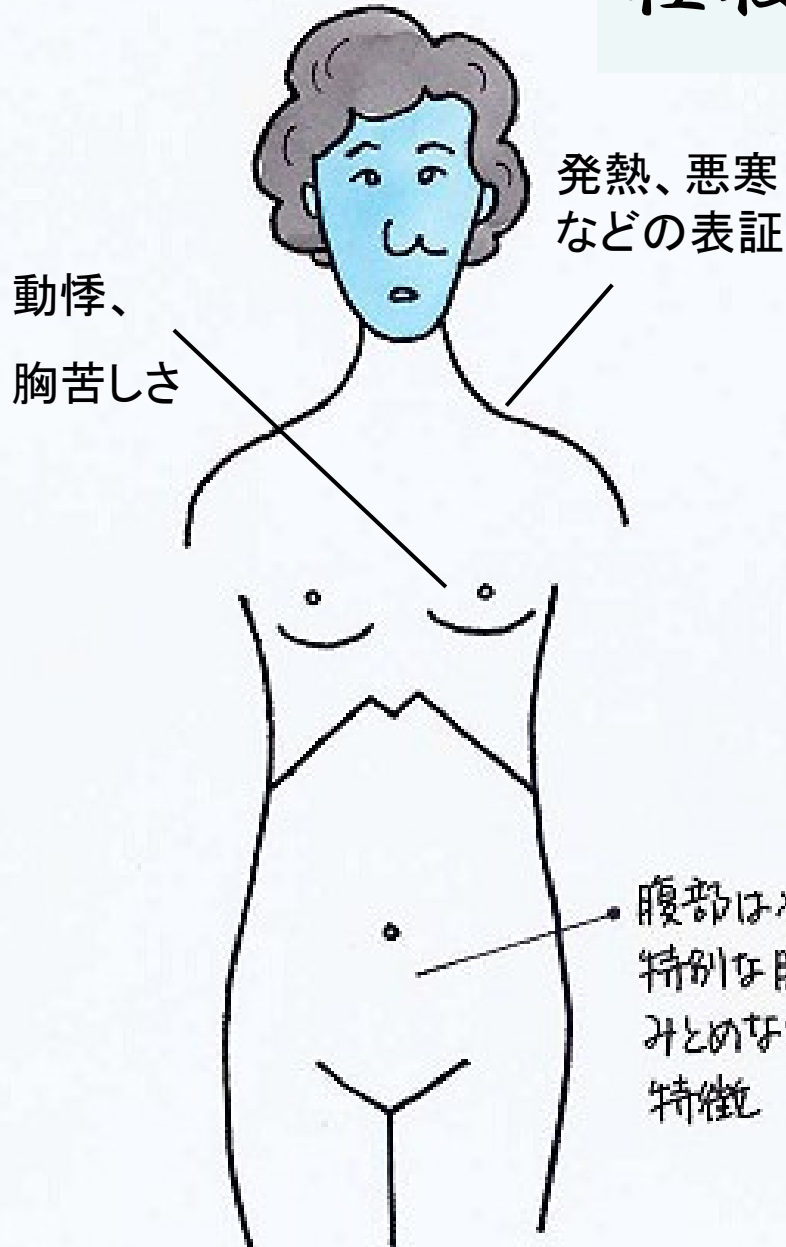


第二十一条 太陽病、下之後、脈促、胸滿者、桂枝去芍藥湯主之。  
 第二十二條 若微寒者、桂枝去芍藥加附子湯主之。



去芍藥  
 (寒降ノ性)  
 ヲ除ク  
 桂枝去芍藥湯

# 桂枝去芍薬湯の証



## 方意

太陽病の正しい治療は発汗なのに誤って下方を用いたため表の邪が胸中に内陷してしまった病態。

表邪は残存するが、胸内の陽氣が虚すので脈が無力となり動悸がする。ただ胸内の陽氣不足なので結胸も虚煩も生じない。

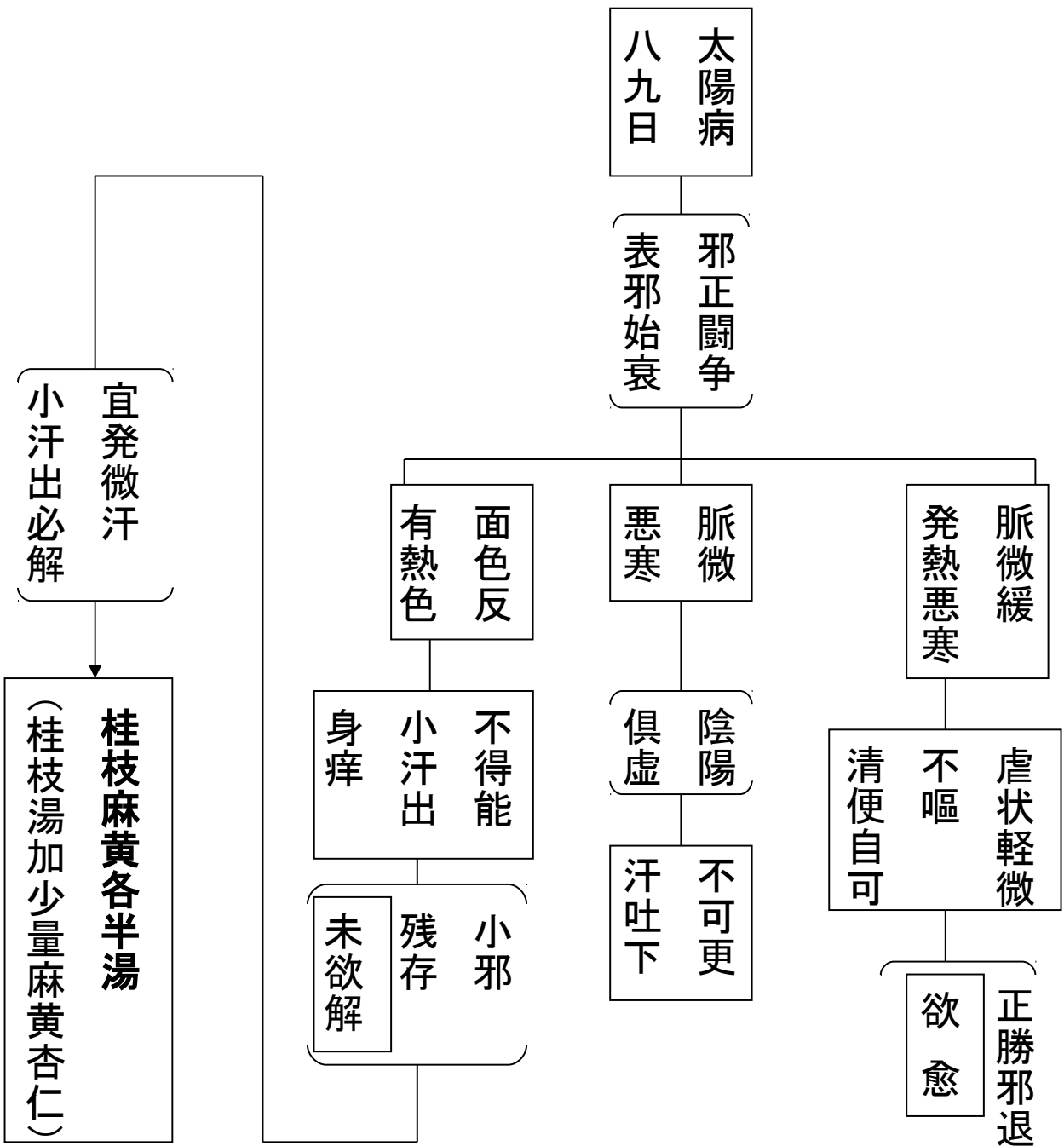
## 弁証のTrias

- 1) 脈は弱く早い
- 2) 動悸、胸苦しい
- 3) 冷えある場合加附子

第二十三條 太陽病、得之八九日、如瘧狀、發熱惡寒、熱多寒少、

其人不嘔、清便欲自利、一日二三度發。脈微緩者、為欲愈也。脈微而惡寒者、此陰陽俱虛、不可更發汗、

更下、更吐也。面色反有熱色者、未欲解也、以其不能得小汗出、身必痒、宜桂枝麻黃各半湯。



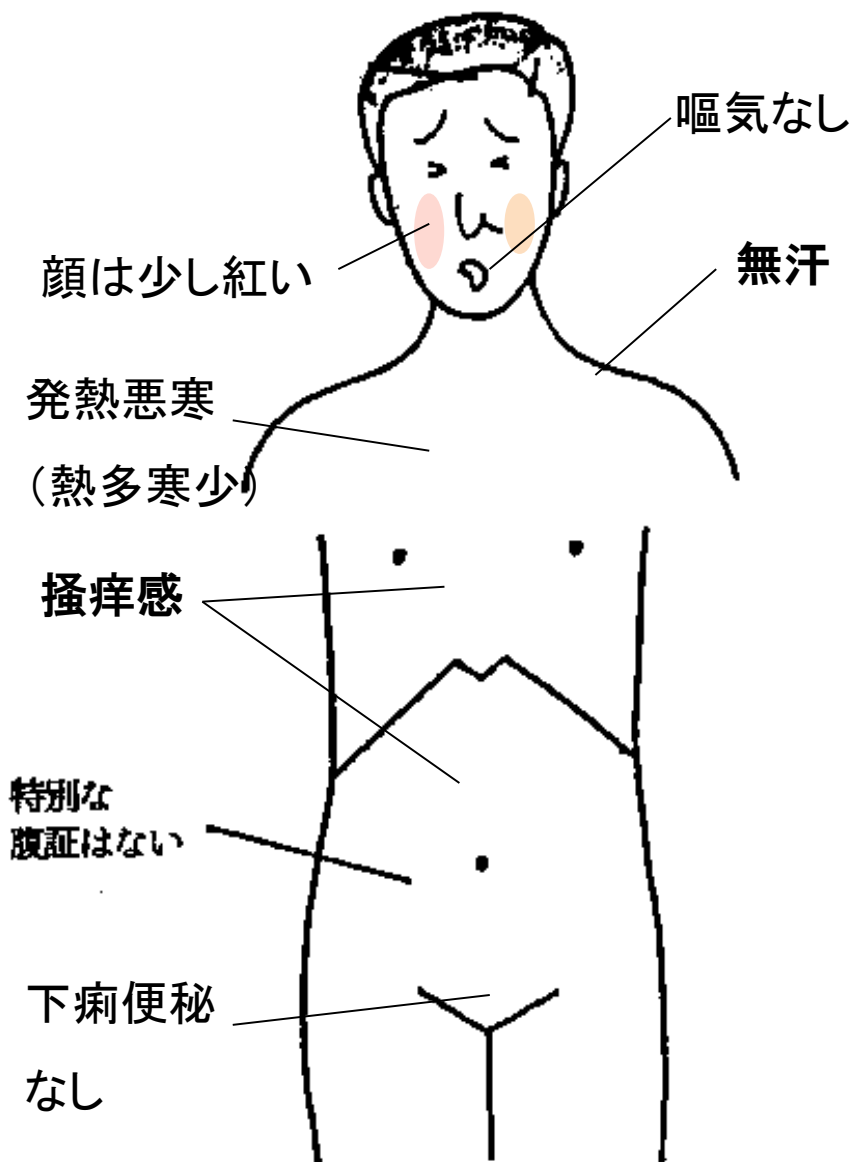
# 桂枝麻黄各半湯の証

## 方意

太陽病が7-8日経過したが完全な自然治癒には至らず、表邪の一部が残存して発熱悪寒がある。熱が優勢で瘧証のように一日に2-3回軽微な発熱があり、汗は出ず、体には軽い違和感や痒みを感じる。

表邪の発散が不十分であった結果なので、極く僅かに発汗させる。

脈は浮微緩。舌は変化なく殆ど正常。

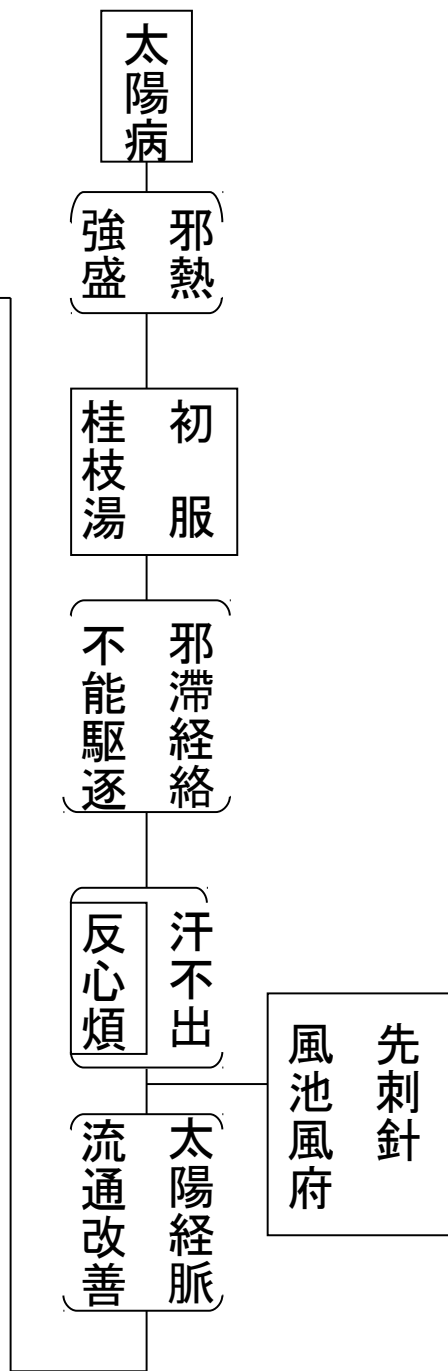


## 弁証のTrias

- 1) 何となくカゼが残った感じ
- 2) 発疹や紅斑を伴わない掻痒
- 3) 無汗、虚脈

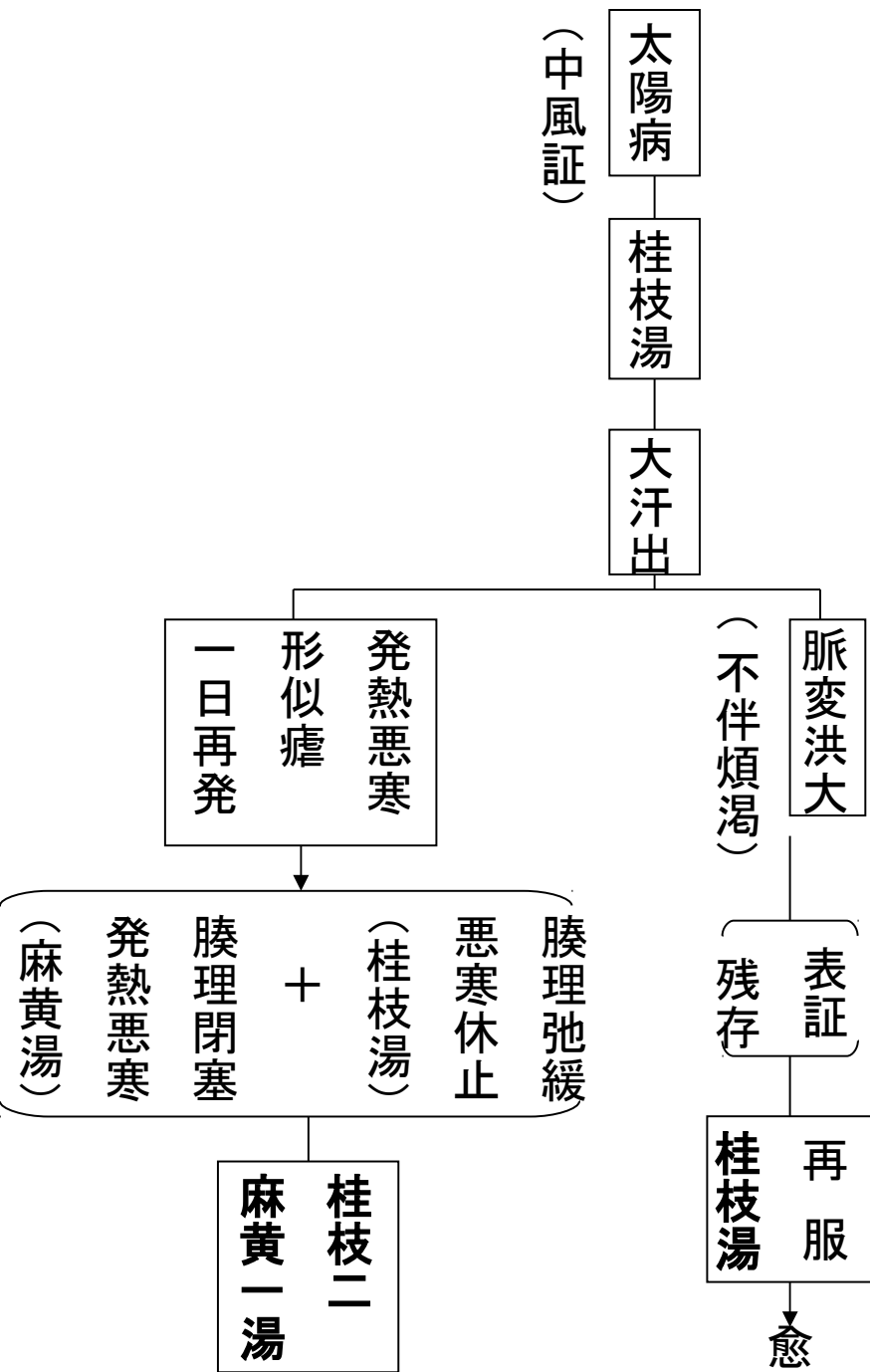
第二十四条 太陽病、初服桂枝湯、反煩、不解者、先刺風池風府、

却与桂枝湯則愈。



第二十五条 服桂枝湯、大汗出、脈洪大者、与桂枝湯、如前法。

若形似瘧、一日再発者、汗出必解、宜桂枝二麻黄一湯。



# 桂枝二麻黄一湯の証

## 方意

桂枝湯を服用して、大量に汗をかいたが表邪が完全には解されず、解放されない邪の一部が腠理の間に残存して鬱し、瘧証（おこり）のように一日二回位発熱を生じる。発熱悪寒、発汗、脈は洪大であるが煩渴は無い。舌ほ変化なし。治療は少量の桂枝湯と更に極少量の麻黄湯を併せ、微かに発汗。

口渇はない

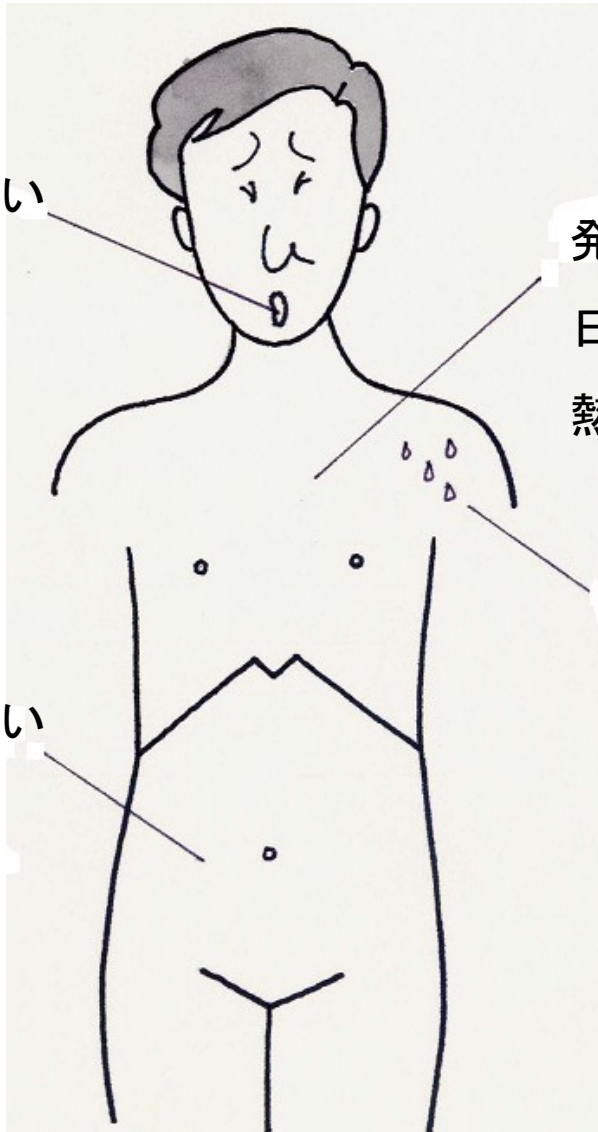
発熱悪寒

日に1-2回  
熱が上がる

汗をかく

特別な

腹証はない



## 弁証のTrias

- 1) 汗をかくが口渇はない
- 2) 日に1-2回必ず発熱
- 3) 脈は洪大

第二十六条 服桂枝湯、大汗出後、大煩渴不解、脈洪大者、

白虎加人參湯主之。

太陽病  
(中風証)

桂枝湯

大汗出

大煩渴

脈洪大

熱盛傷津

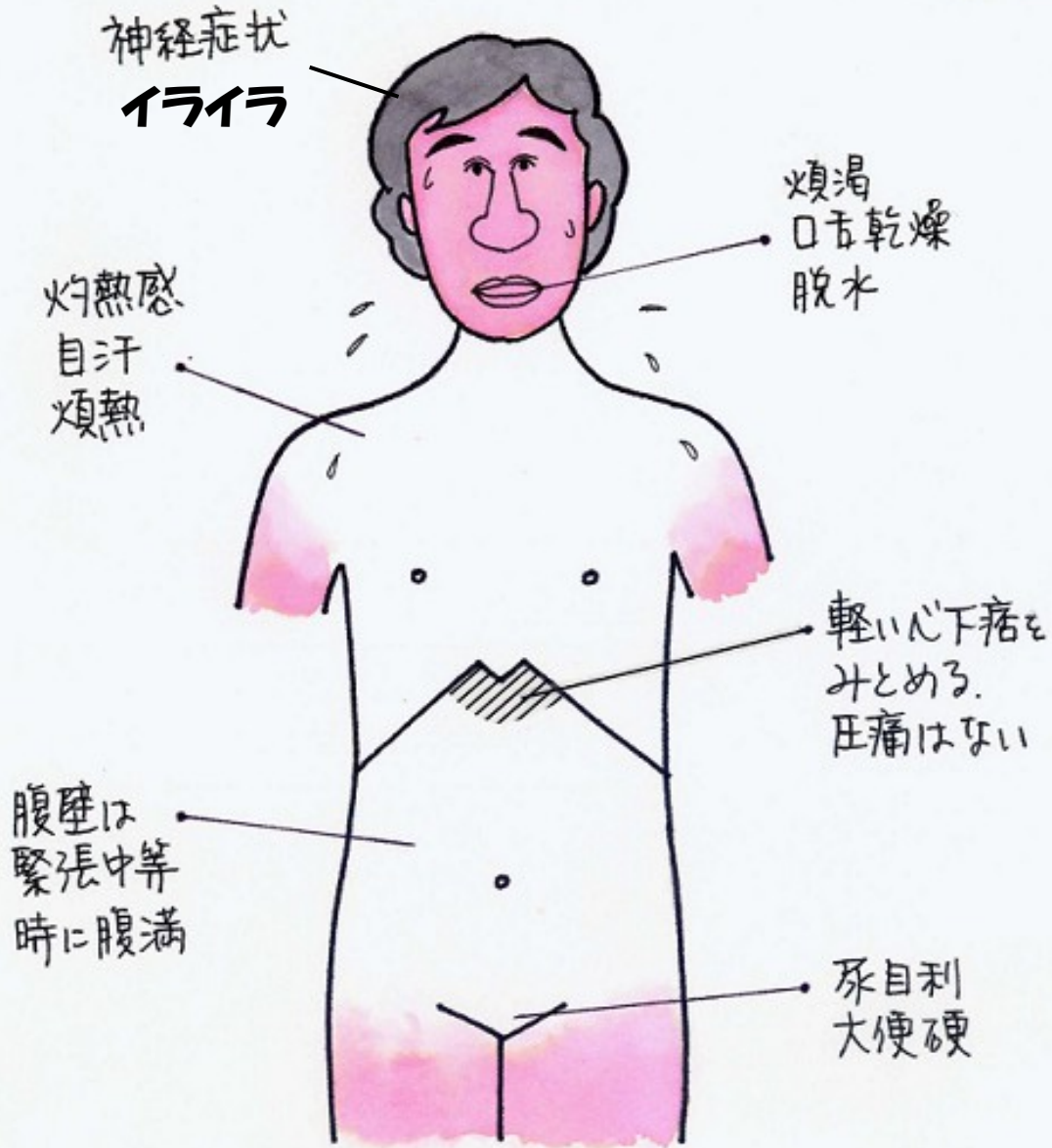
裏熱旺盛

陽明病轉屬

白虎加人參湯

君藥	臣藥	佐藥	使藥
石膏	知母	人參	甘草
清熱止渴	清熱滋陰	益氣生津	補脾止渴
			補脾和胃

# 白虎加人參湯の証 \*



白虎湯に人参一味を加えた  
ものである。熱と渴が主症状  
白虎湯証に似て内外の熱が  
盛んで、津液が欠乏し、煩渴し  
乾燥脱水の著しい者に用いる。  
病位は陽明病経証、内外熱盛  
脈は洪大滑数  
舌は口舌乾燥、白苔黄苔

## 弁証のTrias

- ・口渴、多汗、尿自利
- ・心下痞
- ・皮膚灼熱感



体の内外ともに熱が旺盛であるが、発汗過多のため  
正氣は衰え津液が不足した気陰兩虚証である。

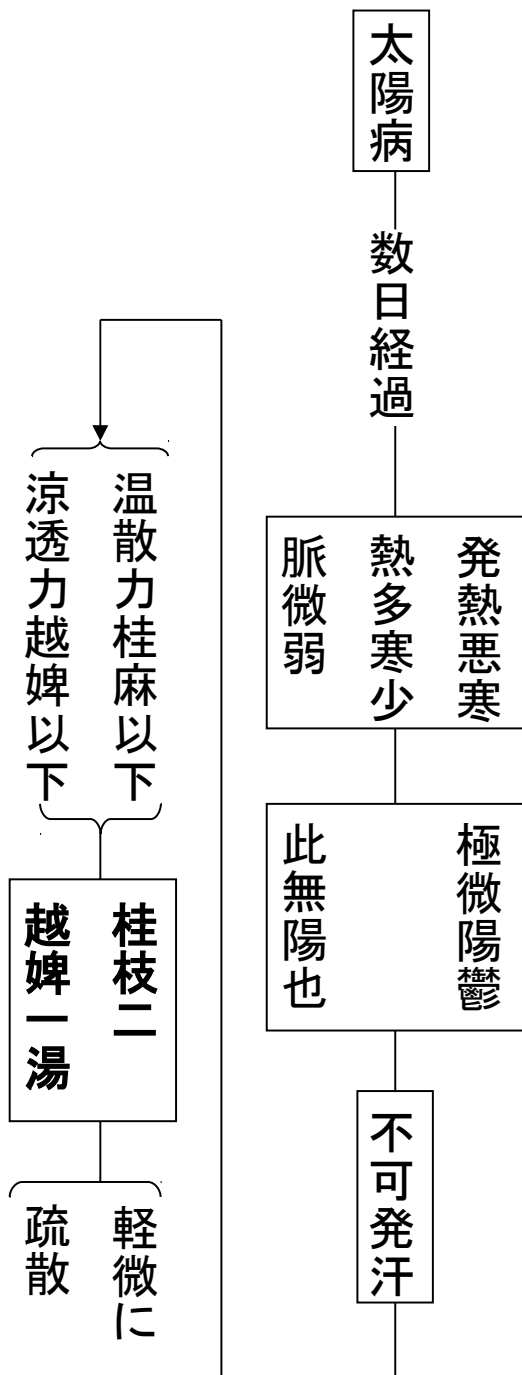


第二十七条 太陽病、発熱悪寒、熱多寒少、脈微弱者、此無陽也。

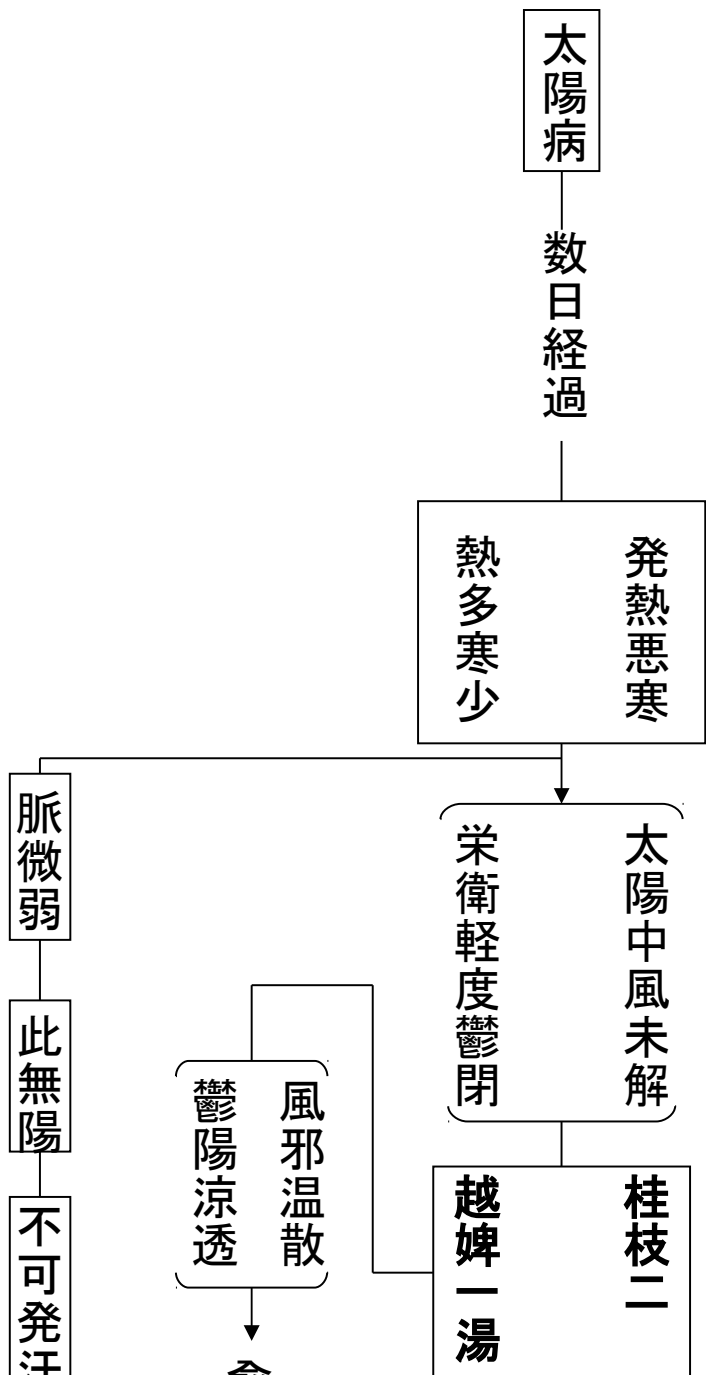
不可発汗、宜桂枝二越婢一湯。

本条には二通りの解釈が考えられる。

その一



その二

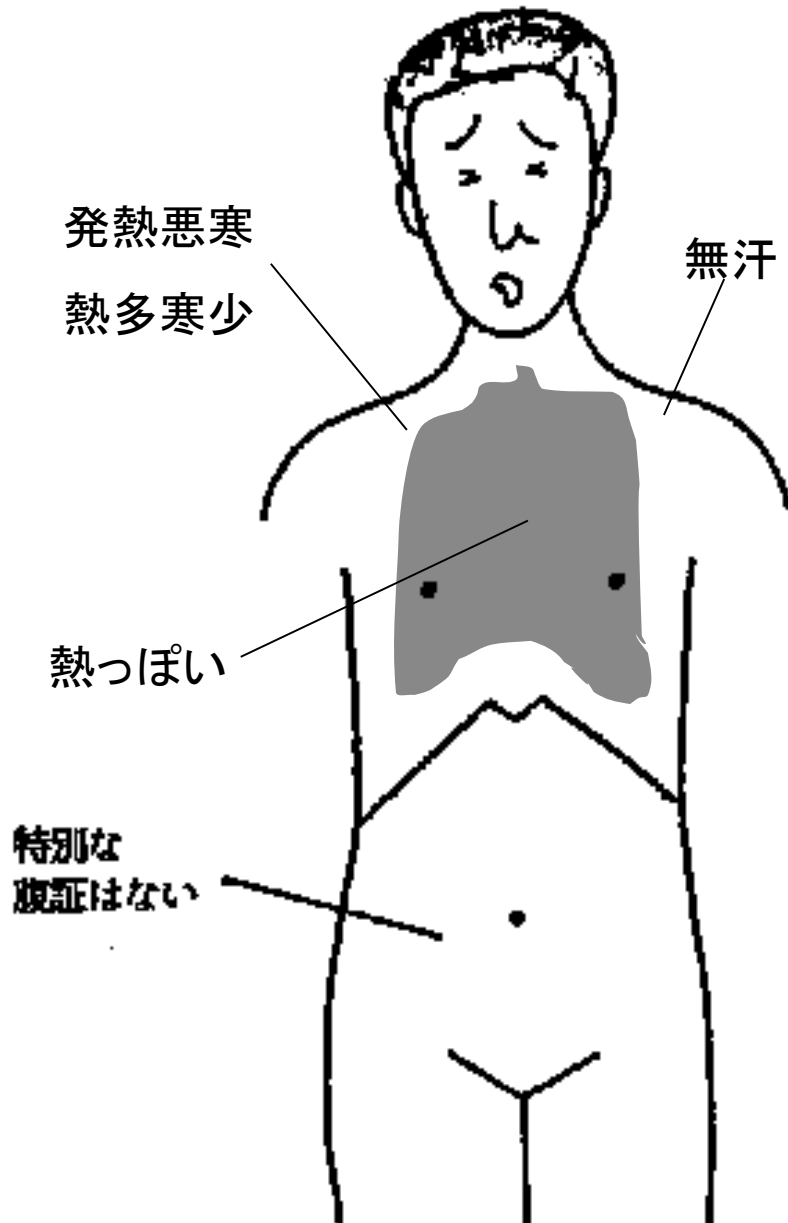


# 桂枝二越婢一湯の証

## 方意

太陽病が数日経過するが完全には治癒せず、表邪の一部が肌膚の間に鬱閉させられているので発熱悪寒はあるが、若干熱多寒少の状態にある。脈は微弱。

これに対しては桂枝湯で表の残邪を温散解肌し、麻黄石膏で皮下の鬱熱を清泄透散させる。本方は桂枝麻黄各半湯より杏仁を去り石膏を加味した内容になっている。



### 弁証のTrias

- 1) 太陽病治癒遷延
- 2) 熱多寒少
- 3) 脈微弱

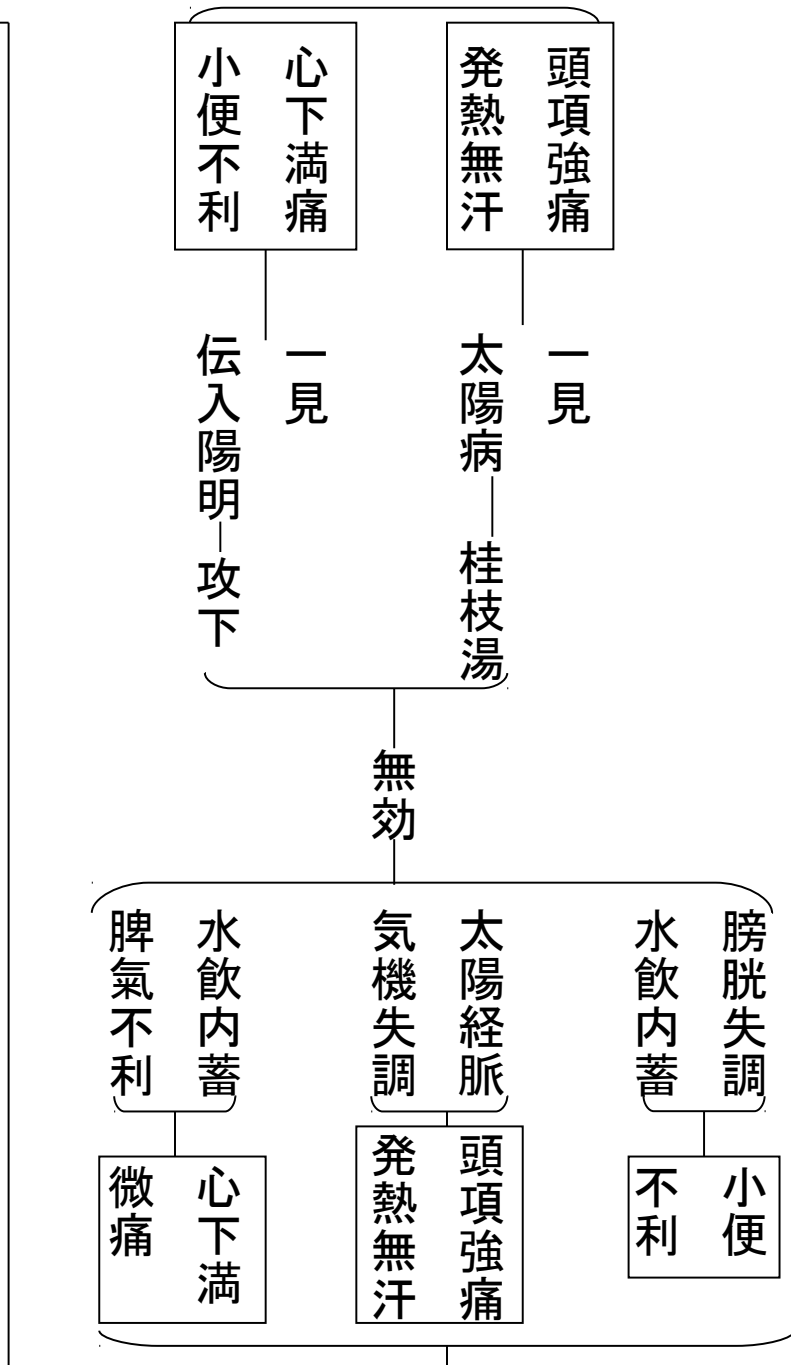
# 桂枝湯、麻黄湯、越婢湯の各合方加減方の構成と分量比較

	桂枝	麻黄	石膏	芍薬	甘草	杏仁	生姜	大枣
桂枝湯(12条) (下段グラム数)	三両 4.0			三両 4.0	二両 2.0		三両 4.0	十二枚 4.0
麻黄湯(35条)	二両 5.0	三両 5.0			一両 1.5	七十箇 5.0		
越婢湯(金匱)		六両 6.0	半斤 8.0		二両 2.0		三両 3.0	十五枚 3.0
桂枝麻黄各半湯 (23条)	一両 16銖3.5	一両 2.0		一両 2.0	一両 2.0	二四枚 2.5	一両 2.0	四枚 2.0
桂枝二麻黄一湯 (25条)	一両 17銖4.5	十六銖 1.5		一両 6銖3.0	一両 2銖2.5	十六箇 1.5	一両 6銖3.0	五枚 3.0
桂枝二越婢一湯 (27条)	十八銖 2.5	十八銖 2.5	二四銖 3.0	十八銖 2.5	十八銖 2.5		一両 2銖3.5	四枚 3.0
大青龙湯 (38条)	二両 3.0	六両 6.0	鷄子大 10.0		二両 2.0	四十箇 5.0	三両 2.0	十枚 3.0

第二十八条 服桂枝湯、或下之、仍頭項強痛、翕翕發熱、無汗、

心下滿微痛、小便不利者、桂枝去桂加茯苓白朮湯

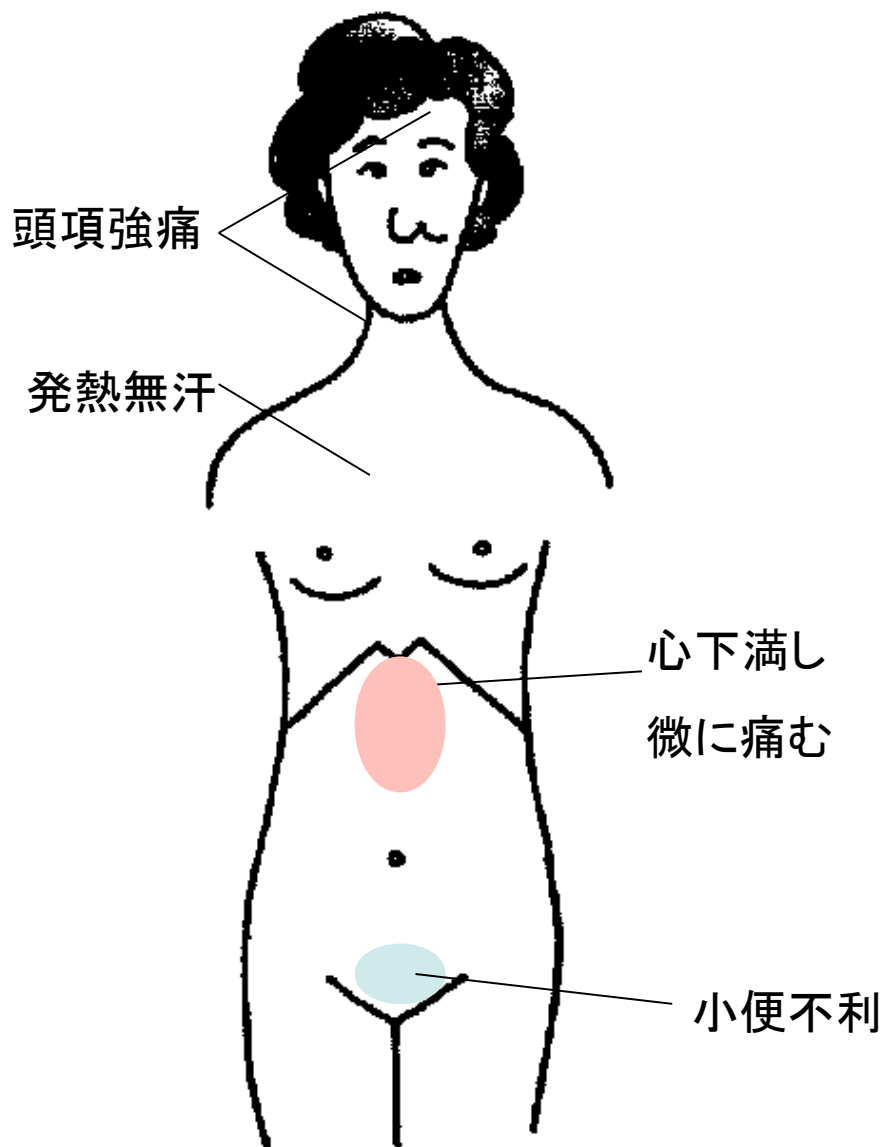
主之。



注 本条は太陽病に桂枝湯を与えて、表邪は解したが心下に水飲

が停留して、心下滿微痛、小便不利を呈したとする解釈もある。

# 桂枝去桂加茯苓白朮湯の証



## 方意

頭項強痛、無汗、発熱があり、一見太陽病に似るが、尿不利と心下満、微痛を伴っている。実は膀胱の気化作用が失調して水飲が心下に停滞したもので太陽病ではない。従って桂枝湯も瀉下方も無効で水飲内停を治すべき証である。

桂枝湯類似の証候を呈すが表証ではないので桂枝を去り、利水の茯苓白朮を加う。

### 弁証のTrias

- 1) 太陽病に似た症状
- 2) 小便不利、心下満して微痛
- 3) 解表剤や瀉下剤が無効

第二十九条 傷寒脈浮、自汗出、小便數、心煩、微惡寒、脚攣急、

反與桂枝、欲攻其表、此誤也。得之便厥、咽中乾、煩躁吐逆者、作乾姜甘草湯與之、以復其陽。

若厥愈足温者、更作芍藥甘草湯與之、其脚即伸。

若胃氣不和讞語者、少與調胃承氣湯。

若重發汗、復加燒針者、四逆湯主之。

傷寒

脈浮  
微惡寒  
自汗出

太陽中風

附子湯

復陽

(三〇条)

桂枝加

温經

愈

(正解)

脈大  
小便數  
心煩  
脚攣急

為虛

少陰病

桂枝湯

(誤治)

陽虛寒盛  
四肢厥冷  
虛陽上浮  
咽中乾  
裏氣不和  
煩躁吐逆

腎陽不固  
陰陽俱虛  
陰血失養

甘草乾姜湯

回陽温脾

足温厥愈

芍藥甘草湯

益陰和陽

脚攣即伸

復陽過剩  
陰液損傷

胃氣不和  
讞語

調胃承氣湯

重複發汗·加燒針

火逆亡陽

回陽救逆

四逆湯

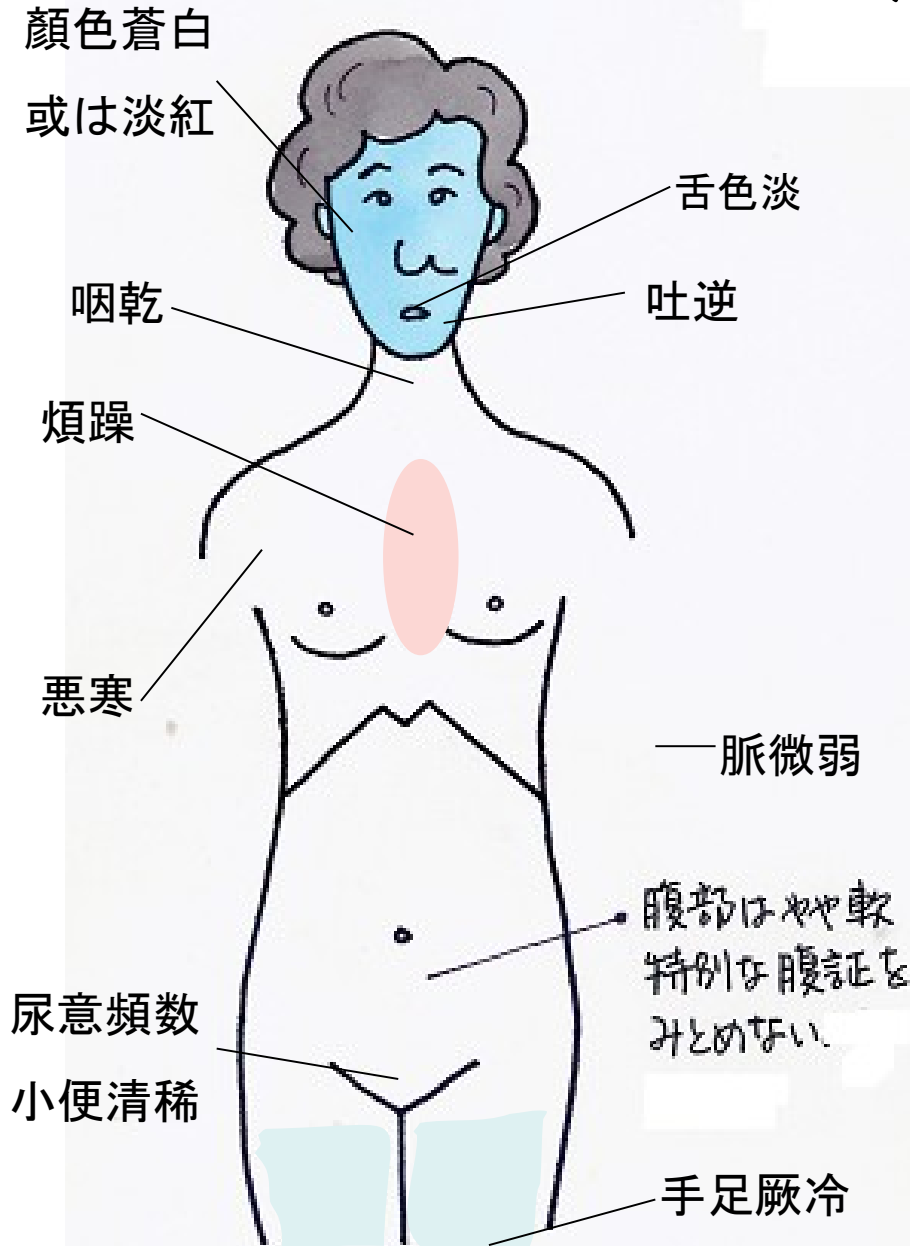
第三十条

問曰、証象陽旦、按法治之而增劇、厥逆、咽中乾、兩脛拘急而讖語。師曰、言夜半手足當溫、兩脚當伸。後如師言、何以知此。

答曰、寸口脈浮而大、浮爲風、大爲虛。風則生微熱、虛則兩脛攣。病形象桂枝、因加附子參其間、增桂令汗出、附子溫經、亡陽故也。厥逆、咽中乾、煩躁、陽明內結、讖語煩亂、更飲甘草乾姜湯、夜半陽氣還、兩足當熱、脛尚微拘急、重與芍藥甘草湯、爾乃脛伸。以承氣湯微瀉、則止其讖語。故知病可愈。

注 文脈、内容は第二十九条の通りなので、図解は省略します。

# 甘草乾姜湯の証



## 方意

太陽病中風証に少陰病の陰陽両虚証を伴っていて、正しくは麻黄細辛附子湯を与えるべき証であったのを、太陽中風と誤診して桂枝湯を与えたので、虚を虚す結果となり、四肢厥冷、煩躁吐逆、咽乾など、亡陽、陰陽離脱、虚陽上浮に因る諸症を現したものである。

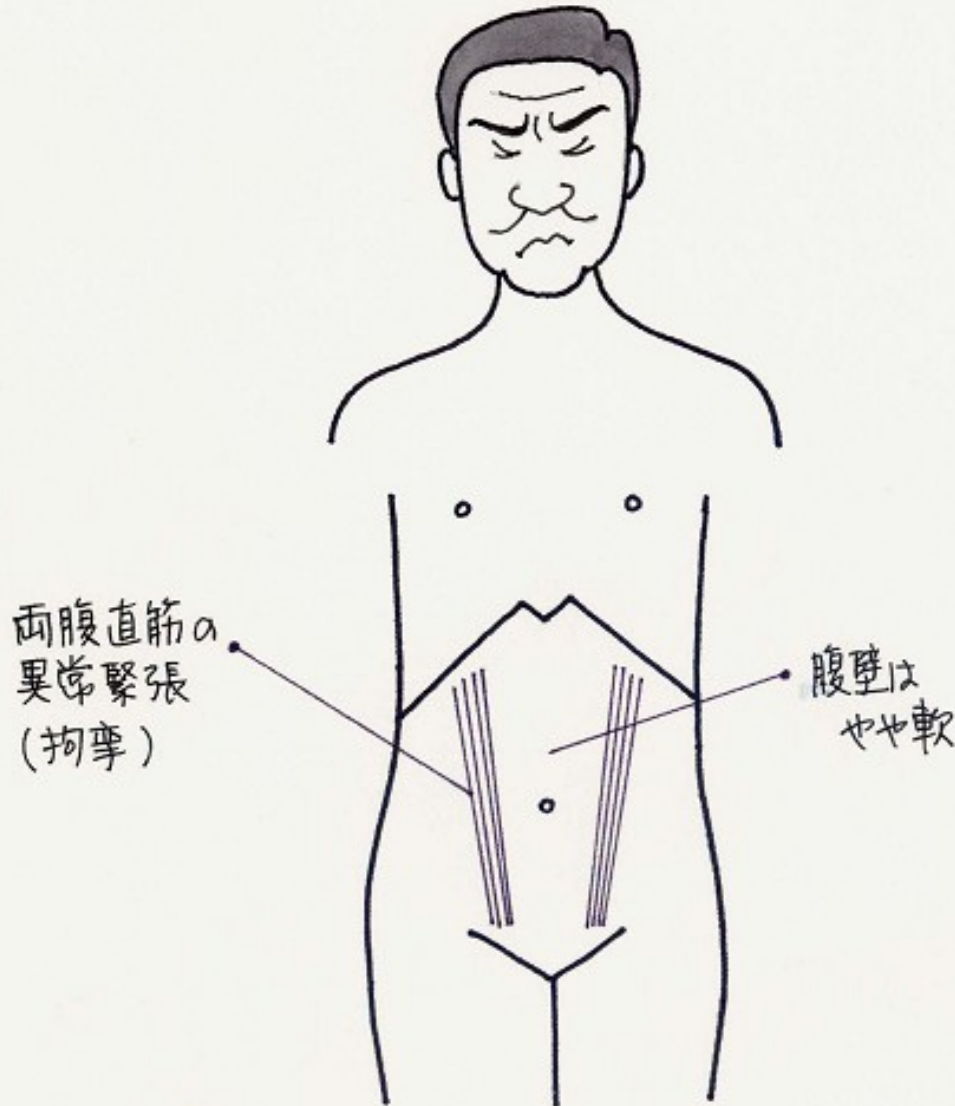
本方で急ぎ脾陽の回復をはかって危機を脱す。

## 弁証のTrias

- 1) 手足厥冷(亡陽)
- 2) 煩躁、咽乾(虚陽上浮)
- 3) 吐逆(陰陽不和)



# 芍薬甘草湯の証



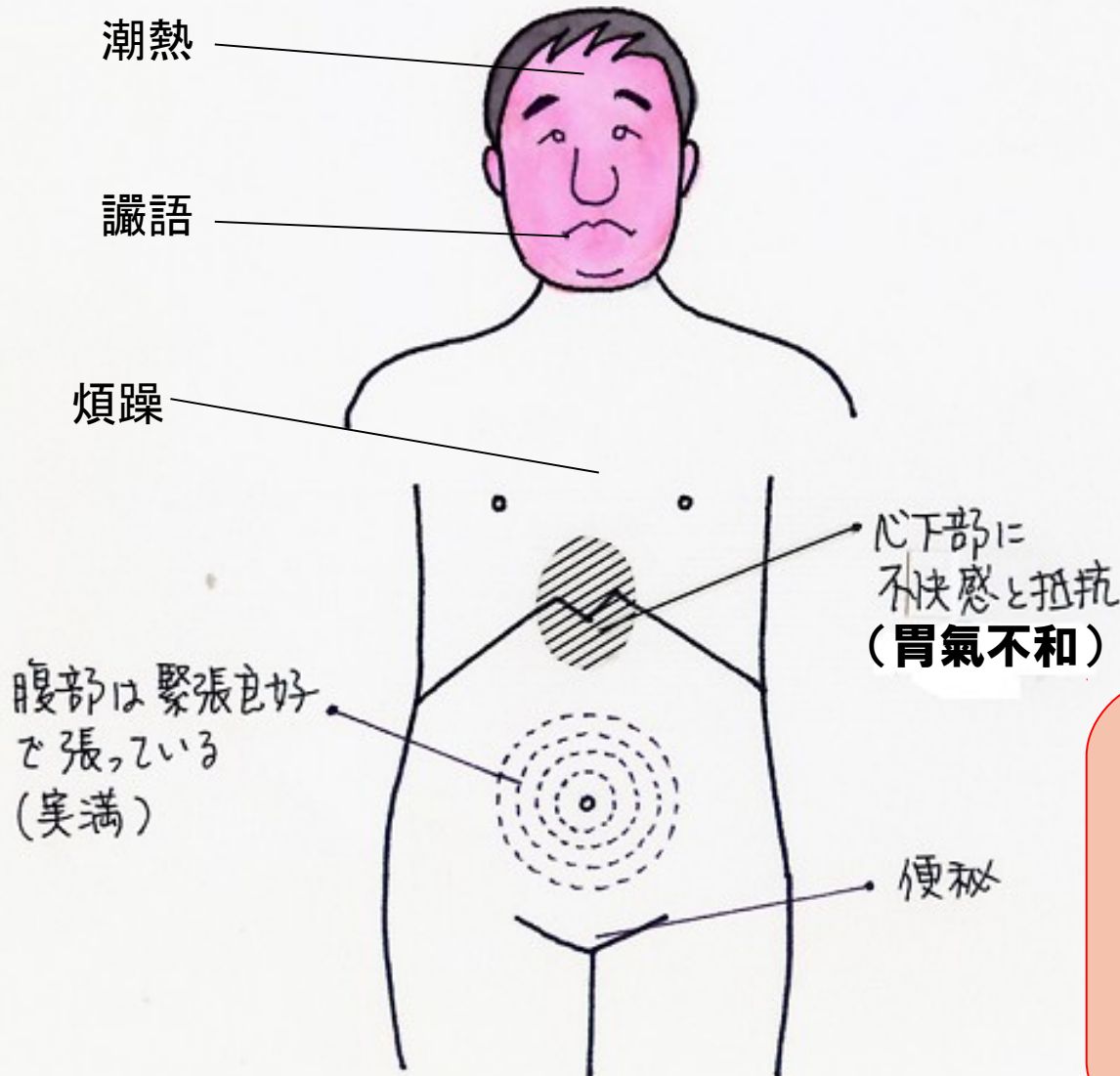
病名にかかわらず、拘挛急迫するものを治す。  
病位は少陽病 裏熱虚証  
脈は浮 或いは沈  
緊張は割によい (緊又は弦)  
舌は湿潤 ときに薄い白苔

## 弁証のTrias

- ・横紋筋や平滑筋の異常緊張や痛み
- ・四肢のひきつれ
- ・両腹直筋のつっぱり

K. Takayama

# 調胃承気湯の証



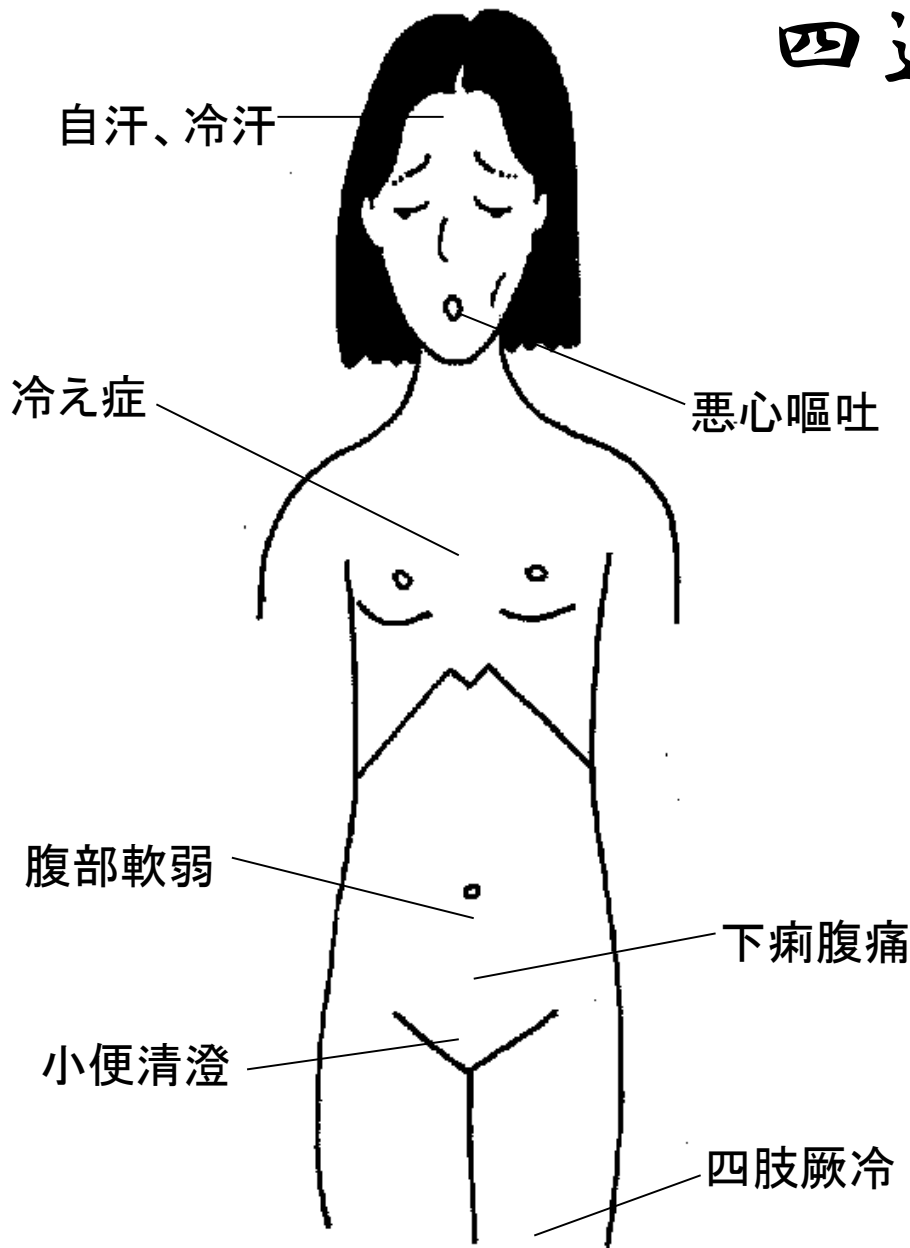
## 方意

陽明病の代表的方劑である承気湯類の中では最も作用の緩和な薬方である。  
順気通便の方劑である。  
病位は陽明病 裏熱実証  
脈は沈実  
舌は乾燥し、厚い黄苔或いは白苔

## 弁証のTrias

- 1) 腹部実満、便秘
- 2) 胃氣不和
- 3) 時に潮熱、煩躁、讞語

# 四逆湯の証 \*



## 方意

本来は少陰病の腎陽虚証を主治する基本処方で回陽救逆を主る。

従って陽虚証で陰寒内盛の時、或は亡陽して虚脱に陥った時は何病に限らず用いられる。

少陰病だけでなく、太陰病、厥陰病、あるいは陰陽両虚の場面で広く活用される、陰病の主方である。

## 弁証のTrias

- 1) 冷え症、下痢傾向
- 2) 手足厥冷
- 3) 倦怠感強く、不活発